

かゝり此地にて刑罪となりしもの又ハ亂世討死のもの、殘骨こゝかゝりし處たるを取取  
 めて搦どなしこれを難妻の森とて今に輪番常立寺の境内にその骸を殘せり  
 辨て山麓の礫石の間に在りて大士に朝餉を進め奉りて鑛倉殿の下知なればこれより當國愛甲  
 郡依智の郷本間六郎左衛門重運が方へ渡り給へどありければ大士うなづき給ひ我ハ其路を知ら  
 ずと仰せ一かば兵士五六人前よちて案内す北をさして往ことまば一にして愛染堂眞藏院とて  
 眞言の寺ありこゝに入て暫時休らひ給ひし住持長福法印法子となつて名を日明と賜ふ今の藤  
 澤の驛長藤山妙善寺これかくて追々御後を尋ひ來るもの多く平左衛門もこゝに追付奉り路次  
 の福も賑しく辨圓の武士その外隨身師依のものそれかれ前後百餘人此日の未時依智の郷本間の  
 郷に着せ給ふ此本間六郎重運といふ代々鑛倉の藩臣たり佐渡國加茂郡を領一岡郡新穂といふ  
 地に役所を構へ總下て佐渡一國の政事を進退す此頃も既に佐渡に在て家には居らず平左衛門頼  
 朝は重運の一族本間三郎左衛門に大士を預け渡し追て鑛倉の沙汰を待べ一と言さりて立歸る又  
 腹怨きたる者ども十人ばかり大士の前よ手をつき頭を低聖人のいかなる人に渡らせ給ふと眼の  
 みたり不測を拜み奉りぬ我々が昨夜よりの罪はゆるし給へ年頃せし念佛は捨はべるどて火打袋  
 より珠數と取出して切て捨るもあり又一生念佛の言と誓言を立るもありて口々も題目を唱つ  
 大將頼朝の被追て鑛倉にかへりけり秋の日影のたそがれて今宵ハ九月十三日後の明月と

て首垂す夜之けるが播の兵卒數十人縁の邊り大庭よ並居たり月中天にさし登り千草の露に影し  
 ゐて虫の聲々なき盛しいと面白風情なるに高祖大士にはまねり立念珠を御掌にかけながら月  
 に向ひ自我倒すこゝ讀給ひさて宣ふやう今此月天子ハ法華經の會座に在りたる明月天子は在る  
 やや寶塔品よしては佛敎を壞ふり末法にハ法華經の弘まらせたまふときハ影の形も隨ふが如く  
 守護すべしと誓ひを立そのうへ四王天といふ人間の五十年を一日一夜と成し給ふときくされ  
 ば釋尊入滅より人間世界より二千二百年とれもへせも月天子の御身に取てはわづか四十四日な  
 りその間にはやくも盤山の約束を忘れ給ひハ不測之よ一や守護する事こそ憶はずとも嬉し顔  
 に澄いたらせ給ふのいかに大集經よは日月明らかならずと説仁王經よは度々失ふと説れ最勝正  
 經より三十三天暎の色を現すとこそ見へたるぞいかに月天子月天子と責給ひければ不測なるか  
 な一那の黒雲月にかゝると見へしが明星のとき大星降て庭前の梅の梢にかゝり給ひ其光輝をど  
 りて物を貫くが如し番の兵卒等是を見ておなれそろしと縁より飛下大地にひれふ一又は家の後  
 に逃たるものもあり落葉をさそふ木枯の塚と昔て物凄く折しも江の島の海の鳴こと激しく地  
 むひく又恐ろしく覺へけるかゝる處へ本間重運の代官本間右馬尉鑛倉より立文を持って走りつ  
 き大士よ見へ奉り彼の地の取沙汰には日蓮聖人も御臺所の御懷妊にて一度ハ御免ありけれども  
 死罪は逃れ危れがたしと聞つるよかゝる御喜びの御狀出たれば我も嬉しく二時が間に参りつゝ

たりとかなる御下知の趣は本間六郎左衛門が預りて佐渡に渡すべし必らず過失あるべからず  
 とぞまゐるしける明れば十四日の卯の時頃本間十郎又鎌倉より歸り大士に向ひ奉り鎌倉まで聖人  
 を御師依なす惟池四郎は我が妻の舍弟なれば此方に立寄り聖人斯ならせ給ひ一後は御弟子方々  
 いか、なり給ひ一やと尋たるに御弟子の長とか聞へ一日昭師名越の御老室に在してさのみ十三  
 日の早天御弟子衆も何やらんいと含め由比の濱土といふ處に退きかこみ各々身をひそめ給ふ  
 よ一さるを日朗師の御老室を去りかねておひけるに御下知としておまたの雜人松葉が谷に  
 來り其御老室をうち壊したるに日朗聖人茲に在したるゆゑこれ日蓮が一類の道心なりとて細を  
 懸て引立たるを日進とかいへる齡十二三ばかりの小法師かけ來り我をも縛て給れと手を後より  
 て摺倚を日朗臂もて押隔て御身はいまだ小兒なれば彼方へ往ねと目配しても聞入す我も日蓮が  
 弟子なるいと雜兵の塵も賣り離れ給はず是非なく共に細かけて名の知らねどもそのほかも在家  
 四人を撈め捕り流谷左衛門の預りとして土の半に籠られたりとしてこれを見聞く人かたり傳へ  
 を絞らぬのなかりけりと彼の地の様子かれこれの物語も哀れを催し給ひけが此本間十郎をい  
 めとして本間三郎左衛門本間辨坊本間右馬之尉等みな六郎重連の一族にして依智に住居なけ  
 るゆゑ前祖大士の奇特も感伏し一門餘類他属までこゝに聚り教化を受十三日十四日の兩日に男  
 女の改宗七十八人僧分の者二十五人法弟にぞなりにける

依智降の靈場上依智梅屋山妙傳寺中依智寶塔山蓮性寺下依智明星山妙純寺あり

まじかし三光山梅光寺といふ寺在て梅の靈木ありしが中古洪水を流れて其跡を失ひとい  
 ふ斯敷の寺院いづれを其靈蹟と仰がん思ふに本間の一門多く此地に住で重連をいづれ  
 各大士の檀越となり後年その邸宅をれいし寺を建立ありしゆゑ今に寺院も多きなり九月  
 十三日より十月十日まで此地に在したる御化尊の靈蹟なればこれと思ひなやむ事な  
 れ今現在の三箇處の靈場を巡拜し必念口唱れたりあることを三師即一能入の信者と云べし  
 荆園茂らんとすれば秋風これを枯し賢人明かならんとすれば俗人これを陰す釋尊に提婆あり太  
 子守屋あり月よ村雲花よあらし信心色ませば災難又色を増す善尺魔の世なりけり此頃鎌倉  
 町に在いて火を放ること毎夜數十ヶ戸或は社まで人を切るもの多くありてこの日蓮が餘類  
 爲なりとて師依の檀越弟子の輩二百六十餘人を撈捕り所を逐べきか島に流さんか宿谷の半を  
 弟子を首を切べきかと評議取取なるに毎夜の惡業猶止ざりければひそかに密吏を置てこれを  
 捕へけるに皆念佛等の盜者ども日蓮に惡名負せんどの評議なるより粗さこへければ二百六十人  
 も半ひも宥赦たり此等のよりの四條類甚より使を以て告察る此返事として龍の口法難の時厚き  
 志を見せ給ひ一事の世に忘るべきと細々書附り給ふ此秋もくれ冬の初めにありければ今  
 歳の例よりも寒さのはやくて氷やいたく結びけん鮫刺の氷のねと瘦て身よたへ難き夜半の霜

かきねて隠身さへ夜明でびく思すにつけ日朗の宿谷が土の半にうちこめられいかよ此夜を助  
 すらんと涙に氷る御視ひきよせ給ひ紙とりのべての御文章日蓮明日はひや佐渡が島へ参るあり  
 今宵の寒さよつけても半の中の休相思ひやられていたりくこそ覺ゆるなれ世間に法華經を讀  
 り口ばかり詞ばかりの讀むも心に讀ず心に讀むも身によまず貴邊の身と心に讀給へば父母な  
 らびに一切衆生を助け給ふべき御身なり法華經は諸天撒夜法の爲に守護すると見へたればた  
 とへ今御身を苦しめらるゝとも別の事はあらど御救免有て半を出させ給ひ疾々來り給へ目出  
 度面會を還べいとぞ遊ばしける又太田左衛門曾谷入道金原法橋へも法門をたゞめこれを合せて  
 鎌倉に贈り給ひ十月十日依智を御發足ありけるに誓固の武士前後をかこみまた御見送りよハ日  
 興日向宮木殿よりの入道一人又日朗の御母妙一尼よりの御人その外熊王四郎など五六人傳添奉  
 り此夜は武州入間郡桑川に宿り明る十一日新倉にさしかり給しに新倉の地頭墨田次郎時光そ  
 の妻難産よ苦みけるゆゑ此地の出産神よ新念を籠たるに昨夜の靈夢の告よ明日は日蓮といふ名  
 僧この地よ來るべし其人ならでば助けがたしとありけるにぞ次郎時光曉天より途中に立て待受  
 奉り其祈願を請大士路の側よ小社のありける其前に休息てまべし後經有て本尊を給ひしよ忽  
 ち安座してその小兒も亦壯健なり夫婦をハトめ一門の喜ひ大方ならずこれより深く大士を歸依  
 一時光後年出家して日徳と號し新曾妙顯寺を建立と今に子安の曼陀羅を什寶とす十三日兒玉に

至る六右衛門時國大士を我が家に宿し奉り一家終りなく改宗を十四日上野國甘樂郡栗津まで  
 案内として送りまらせ長谷川長源が家に入奉る長源が子孫今尙在て其時の古蹟とて庭に法  
 大木あり長源寺といふも其人の建立といへり又これより近き藤岡も御小池の舊蹟にて天龍寺  
 といふ寺あり越路のはやき雪をこともわかぬ山路をさのふり降りけふい下り作人々の脚踏  
 りよ愛を忘れ日數かさねし旅の空廿一日の夕つかた越後國三島郡寺泊よ着給ひ石川宇右衛門吉  
 辨といふもの兼て大士の事を問傳へてありければ家よ迎へて饗應しこゝに船出を待給ふ日數六  
 日の間に妻子一屋奴婢まで深く化導を蒙りける後年こゝよ寺を建立光山法禪寺といふ御硯氷の  
 井も今に存せりかくて廿七日海上相れたやかに見ゆるとて船越のかいましきよ高祖は富木氏  
 への書をまたゝめ各これより歸り給へ人あまた具して彼の地へ渡ること鎌倉殿への仰りありて  
 又て日蓮が爲ならずとありければ富木の使なる入道も力なく主人胤頼は聖人の在さん處をいつ  
 くまでも見と、けこれを渡し奉れと言合められはべりぬとて錢一結をさし出す其餘の人々も火  
 の中水の底までもとねるへとも世の憚りよ是非もなく御袖に廻りて汀に送り奉り淡離る、船  
 をふし拜みつゝ各々名残をしくかへりけるまかるよ此日海上俄に風あれて御船を此方へ吹戻し  
 浦原郡角田の岸よぞ着たりける大士の磯に題目を認めて龍神に法樂し此邊に人家有りやと其處  
 此地を歩行たまふ折からいと美麗しき二人の童子の大士を拜して云やう此山の洞に毒蛇ありて

寄す聖人の法力を以て降伏させ給れといふその童子の案内に任せて山に登り給ふに天邊  
 一處より其處を望見給ふに恐蛇蟻て口より毒炎を吹出し霧の如き毒氣熾穴より立  
 登るその毒氣臭頭も碎るやとれずばかりに有ければ大士あたりの小石を拾ひ逸くに御座と  
 寄てその穴に投入給ひければそれより毒蛇かたちを隠し永くその害の根たりける此角田の地に  
 石田五郎遠藤治郎の兩人ありて大士を察に請待し二人がいふやう昨日海上あれ出て御船をこ  
 は寄たるの彼の毒龍の降伏を願ふとの諸天の御計らひなるべしとて歡喜大方ならず後に角田  
 山妙光寺を建て日印聖人を開山とせりさて廿八日早天順風に出帆ありしに沖合邊の大  
 浪逆風暴に吹起り大海逆怒荒波の山を重ねてうちかへそ何かはまばしも懸ふべき船をゆり  
 揚ゆり仰し楫柄折て帆綱も切水主楫取も色を失ひ既に危く見へける折から高祖大士の船の船  
 に立揚り念珠ねし揉御經終り水棹を取て海面に南無妙法蓮華經と書給へば其水棹の跡のづか  
 ら向波立て十丈ばかり光明殿御題目海上にありくとおがまれてまばし波間も消やらまばし  
 の浮題目と今の世までも百傳へ天氣朗かなる時角田山より遠く海上を見渡せばその御水棹の跡  
 いまに顯然として沖の隅とうき沈み波間がくれ見へ渡るありさま實に本地の風流なりと語り  
 寄へりかくて船中の童子ども目のあたりこの奇特を見て一同に合掌し御題目を唱へ奉るに龍  
 船受やまーまーけんそれより風も小罷りて波いとまづかふ夕つかた御船の慈みく佐渡國羽後郡

機が崎甲の瀬といふ處に着船す大士喜び給ひ御墨斗の墨に水を添て磯邊の石は題目を指して此  
 國は妙經流布せんことを表し給ふ附添ひ來りし官吏等は彼是問へてこゝより夕餉を奉りければ大士  
 いと快くさこめ給ひ此地松崎山本行寺に今その時の木椀拵敷など什寶に傳へたりさて  
 官吏のいふやうこれより其路をたどりて新羅の邸へも給へ御身流罪の下知狀は我等が襟にか  
 けのべり別用の取事を取すまー明日は路にて追付ん疾往給へと首さして立別れつゝ去にける大  
 士ひとり困りて東西をあらぬ此處に其方どのみ敷へたる夕霜浴る細道を思東なくも歩行給ふ  
 に古き樅木のもとに立たるひとりの昏頭にて千代の雪をいたゞき頼に老のみみならぬ容貌尊く  
 抱へたるが今宵はこれに宿しまゐらせんとて其家に伴ひて厚くもてなし奉りぬ大士木尊を寄て  
 與給ひ法門の侍路に長き一夜も明曇くこゝを立出て見給ふに襟は松前明神と頼うつたる嗣よて  
 でこれへ去る文永六年本間山城守の暇請にして春日の神なるよしき給ひさへ此一夜の宿  
 の時の恵ありけるよと寄こび給ひ廿九日の夜に雜太郎小倉ある神職の舎にやどりその明の日  
 加茂郡新羅なる本間六郎重運が邸にたどりの霜月の朔日重運が下知として大野の郡原原とい  
 ふ地に退放し奉りけり其住べき處の一問四而の辻堂の軒端傾き壁も疎らに夜の間の風雨ぐべう  
 もあらず本尊と頼ひ佛も見へず下に板敷縫もあらず四邊は京都鳥部山の襟に死人を棄つ三味原な  
 れば鬼體を方へ枯尾花朽たる卒塔婆ぬーや頼問を登へぬ古墳ばかり今宵のこと物淋しく北海

波乃  
海上  
佐渡乃  
難風

題目



の荒海雲とて一まきりに降くる大雪に忽ち埋む三味堂軒は七尺雪の一丈うち拂ひんとする油も  
 して氷柱にとち骨身を削る御艱難其を凌げとて言ねをもあたりよ有一破篋を御身にまとい兼  
 持路を持たり一盞の笠を頭よいたいき夜の明たれを食事とまめらす人もよくに御手  
 淨めつ、懐中より隨身佛立像の釋尊を取いだし雪をつかねて檀となりこれを安置し奉り御遷去  
 づかよ讀給ひ昔唐の蘇武といひ一人の胡國にとらわれ巖窟に在て雪を食として二十年を過  
 たるにも劣らず今日蓮末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる夜にゆへり佛の滅後二千  
 餘年日蓮の外法華經の故にかくまで身を苦しめたる者有とも覺へず日本國の萬人の思まへよく  
 め釋迦多寶十方の諸佛またに奉られまめらせむ其面目よろこび身も餘れりと一心不亂に御經唱  
 題の外更も他事なく見へさせ給ひけり茲は遠處武者遠より四世の孫蓮勝左衛門爲り御有り  
 此佐渡國は流罪せられて憂世の中の惡業煩惱是も亦非なる理を悟り夫婦もろとも割髪し念佛持  
 行も明し慈しけり一日夫婦の密々話かかねて聞たる外道の日蓮鎌倉殿も持あまし此島に流罪  
 せられ程遠からぬ塚原にありとさく阿彌陀如來の大怨敵諸萬人の惡知識ひそかに彼を矢ひなば  
 千僧讚美の功德にも増かたならんと強射を妻の案じて老の身の仕損じて怪我し給ひそとわやふ  
 めに書置たる飯桶も覺へは腕にある物なり一腰かいてみ延下立力足踏雪履も馴し大野の塚原  
 道夜もや、更て北滿原塚原ありとさく一見へんかゝるは日蓮大士の遺傳なり

降杖野邊の雪風の御身を貫く劍太刀食事も絶てけふ五日雪を含んで咽喉をうるはし命の際の初  
 經諸師遠處爲盛うかゝひより唯一討とれもひしが果のまれたる瘦道心殺すも難きことやある一  
 先その法門を防札し返答詰るその時に取取らすも運からずと堂へ押入會釋もなく我の念佛の行  
 者なり法華ばかりの成佛にて諸宗に得道なしといふその證據はいづくありやと亂忍の難問大  
 士のはと笑ひ給ひ雪に道絶この堂へ殊々真夜中氣色變來隨身念佛者に在すなら得道ならぬ  
 隨文の外を尋給ふに及せず御身の頼む淨土の三部彌陀經の其中に舍利弗舍利弗又舍利弗と一尋  
 たらずの御經に三十八ヶ所まで名を召れたる舍利弗尊者その經にては得道なく法華經第二の會  
 座にして妙法蓮華をもつて華光如來となり給ひし其上觀經彌陀四十八願の其中にも正法を勧  
 ものの救ひトとさしきつて彌陀如來も誓ひ給ひしぞされば念佛者の無得道證據の御身の朝夕に  
 爾御經にあるものをのししたなき行者かなと説すくめ給へば爲盛坊の呆れはて我が太刀をもて我  
 を切その法門に擧もたゆみ膝折直して不審の條々問は答ふか訝響のかぎりまられぬ本化の法門  
 や、魂に染渡り涙ながら身身の懺悔徒弟になして給はれと善も強き菩提心雪に頭を擗埋め  
 その授戒を願ひけり妻のかくとも知らずして歸りの道を案トじひ潜に後を尋ね來て外問よき  
 べいたづみて大士の教化夫の得道あらくこれを聞果てともに大士に相見あげ夫婦ももろと  
 法弟となり入目を忍び世を憚り飯櫃を古葛籠にかくし入夫婦のこれを吞食つ、毎夜かゝるく

荒海雲と云一まきりに降くる大雪に忽ち埋む三味堂軒は七尺雪の一丈うち拂のんとする袖も  
 氷柱にとち骨身を削る御難難其を凌げとて言ねともわたり有破笠を御身にまとい兼  
 持路を持たり一蓋の笠を頭よいたり夜明けを食事をまゐらす人もなく御手に  
 淨めつ懐中より隨身佛立像の釋尊を取いだし雪をつかねて檀となりこれを安置し奉り御經を  
 づかよ讀給ひ昔唐の蘇武といひ一人の胡國にとらわれ幾層も在て尊を食として二十年を過  
 たるにも劣らず今日蓮末法に生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる責にわへり佛の滅後二千  
 餘年日蓮の外法華經の故にかくまで身を苦しめたる者有とも覺へず日本國の萬人の惡まばよく  
 釋迦多寶十方の諸佛よだに奉られまゐらせば其面目よろこび身も餘れりと一心不亂に御經唱  
 題の外更も他事なく見へさせ給ひけり茲又遠隔武者遠より四世の孫遠隔在門論の罪有て  
 此佐渡國は流罪せられて憂世の中の惡業煩惱是も亦非なる理を悟り夫婦もろとも別離し念佛持  
 行も明し慈しけるが一日夫婦の密々話かねて聞たる外道の日蓮鎌倉殿も持たまし此處に流罪  
 せられ程遠からぬ塚原にありとさく阿彌陀如來の大怨敵諸萬人の惡知識ひそかに彼を失ひなば  
 千僧衆の功德にも増かたならんと張射を妻ひ棄てて老の身の仕損じて怪我し給ひととあやふ  
 めに法蓮たる飯桶も覺へは腕にある物とて一腰かいてみ庭下立力足踏雪はも別大野の塚原  
 道夜もや、更て北滿原のさあわいさあわい現へばかくもまらぬ高祖大士の遺傳一もそのよけふ

降野邊の雪風の御身を貫く剣太刀食事も絶てけふ五日雪を含んで咽喉をうるは一命の際の御  
 經讀誦遠隔爲盛うかひより唯一討たれもひしが果のまれたる瘦道心殺すも難きことやある一  
 先その法門を助亂し返答詰るその時に取取らすも還からずと堂も押入會釋もなく我の念佛の行  
 者なり法華ばかりの成佛にて諸宗に得道なしといふその證據はいづくもありやと眞忍の難問大  
 士のはくと笑ひ給ひ雪に道絶この堂へ殊も眞夜中氣色變來臨御身念佛者に在すなら得道ならぬ  
 隨文の外を尋給ふに及せず御身の願ひ淨土の三部彌陀經の其中に舍利弗舍利弗又舍利弗と一尊  
 たらずの御經に三十八ヶ所まで名を召れたる舍利弗尊者その經にては得道なく法華經第二の會  
 座にて妙法蓮華をもつて華光如來となり給ひし其上觀經彌陀四十八願の其中も正法を説る  
 ものの救ひととさしきつて彌陀如來も誓ひ給ひしぞされば念佛者の無得道證據の御身の朝夕に  
 彌陀經にあるものをのりしたなき行者かなと説すくめ給へば爲盛坊の呆れはて我が太刀をもて我  
 を切その法門に擧もたゆみ膝折直して不審の條々問ば答ふか傍聴のかぎりまられぬ本化の法門  
 や、魂に染渡り涙ながら身身の懺悔徒弟になして給はれと善も強き菩提心雪に頭を摺埋め  
 その投戒を願ひけり妻のかくとも知らずして歸りの道を案下りひ潜に後を尋ね來て外問もま  
 べいたづみて大士の教化夫の得道あらくこれを聞果てともに大士に相見わけ夫婦ももろと  
 法弟となり人目を忍び世を憚り飯櫃を古葛籠にかくし入夫婦のこれを背負つ、毎夜かゝるく

大士を塚原に供養奉ること百日餘りその功德千日の修行増るとて妻を千日尼とよび夫を阿  
佛坊日待とぞ召しける

塚原三味堂の靈跡の今の根本寺の門前の地なりとぞ京都妙覺寺日蓮聖人の徒弟大泉坊日成  
聖人此靈場を尋給ひ一時茫茫たる荒野の中にいさかしの堂在て人さへ住す傳へいふ此地の  
高祖大士極雜の地もあるその威烈今に残りて尋常の僧は居がたとして人も住すとき、給ひこ  
れ高祖開運の道場大慈悲の靈室なるを何ぞこれを疎かみせんと天文廿一年壬子のトめて一  
字を造立し塚原山根本寺と名づくこれ御法難より二百八十二年の後なり天正年中上杉の家  
臣直江山城守景綱田園を寄附し大いに靈跡を輝けり

期て此國の北海の島根よして人の心も頑ま諸宗の僧もあらくしく就中生驗坊慈道坊印生唯  
阿彌等を始として大士の化道をふかく恐み憤りこゝかこより相聚るもの數十人各々相識し  
ていふやうひかしより此島は沈されたるもの生て歸り一劍のな一鎌倉殿の捨殺し給ふ日蓮なれ  
ば佛恩報謝のためは彼をうち殺したりとも咎めりあらとぞ其殺すべき手術をぞ成たりけるに本  
問重運これを聞て大ひに驚き念佛真言等の發願人をあまた邸に召侍て日蓮の此守護所の預に  
て若過失あらば我が越度なるぞ殊に汝等出家の身として人を害せんとの密謀甚はだ如法ならず  
さばかり恐る日蓮ならば法門よて貴よかといひ波にぞ夫より法師原祖やも評論を一京鎌倉

の名僧さへ敵對がたき日蓮なれば正路の問答ねやつかなし茲よひとつの計畧あり十人廿人の  
難辭か立かへり有無の答へにかいわらず四方八面より質問せかれ此頃の食は飢へ寒氣に閉られ  
中は大半死人に似たりそこを嚴しく責立れば彼金銀にあらぬ身の患の根とめて其上に動作辭儀  
人知らず振殺さば自滅の往生誰か咎めんこれ増たる妙術なりと俄に人を近國に馳廻し腕脛の  
より惡道心益れ法師を殺めけりさても奉行第一と聞へ二十年來かた時も御側さらぬ日蓮聖人の  
臨る九月十三日より宿谷光則が土の半よ身を苦めて任しけるが大士佐渡へ赴き給ふとき依智  
より一蓮の書と贈り今宵の蓮につけても半の中の有様思ひやられて痛しきよし仰遣はされ  
しかば日蓮聖人のその御書を顔にねしわて泣沈み給ひしが此御書を師匠とればはしめし明暮これ  
と贈上給ふにぞ獄舎の官吏もその師匠といひ其眞實の誠を感しこれを聞て共に袖をぞ絞  
けるが衆生もとより佛性ありこゝよ立入る官吏の自然と日蓮聖人の徳實を尊び折々その教化よ  
預りて贈る御題目を捧依し袖のうちに珠數を爪繰者するからず奉行左衛門光則もその法弟の  
聖子と聞てその師日蓮聖人も凡人ならぬを辨へ知りふかく日蓮聖人をいたはりける或時半會の  
官吏主人より賜ひしとして盧橘の實を六七箇日蓮聖人に奉りければ我が御師の好ませ給ふものな  
り現れ半會の身にあらすの海山千里を隔つともこれを捧げて御悅の尊顔を拜し奉んものぞと  
にかきくれ給ふよと彼の官吏もとかに住人先例に歡喜願ひてさて日蓮聖人よ向ひ我々よさに計



らひいへるべし久しにて御願に値て安否を防給へどて路用を布施するもあり乾飯を奉るもあり  
 紙に不借なにくれどまのびやかに土の半を立出越も欲き心地して半にそへみり足踏を厭ふ空な  
 北海の佐渡とよ一ていそまつ、塚原の雪の中に大士を防奉るに夢かとはかり驚き給へり  
 在すこと四年とすいほも月を數ふれば三年も過すその間日明聖人茲に御師を訪給ひ一こと  
 八かきよたよふその辛苦艱難を思へば今泰平の御代安座し斯心易く御題目を唱ふること皆  
 先師の大恩我等が侍福をと思はれける高祖大士も此十二月十三日の初日輪ふたつならび出たる  
 こと安國論は符合するよしなき種々の御物語有て廿三日宮木殿への書又清澄なる淨願義淨へも  
 書と認め二通合て日明師へ渡し鎌倉より能便宜もあらばこれを贈りくれよとて名懸をくも日  
 初聖人御服をぞ賜りける明れば文永壬申春かへれども北國の雪は盛れる空寒くけふも三月  
 十六日鳥澤さへ踏絶へ塚原にいどかしましき人書いかなるぞと心得ねとうち見やり給へば  
 切たる念佛諸宗權冬よりかり催したる越後越中出羽奥州信濃常陸六ヶ國の法師原印生坊慈蓮  
 功と先立念佛宗には淨土の三部或は止觀眞言等弘法慈覺の書類まで或は手に持又の離僧の  
 よかけさせ數百人さるも廣き塚原へ轉々と取つめたり今日こそ惡僧日蓮が問答にさいつたり  
 聲を合すを見物せんと在家の男女尼道心儀の甘さを慈ふが如く鐘の聲さよ聚るに似たり六師を

佛門重過これとさしもし過失こともあらんかと兵卒に答櫻椿をもたせつゝみづから小高を岡に  
 在てゆせり期て諸宗の侍等口々に惡口一我一番に取かゝらんと先を諍ふ在家の族は聲とよ阿  
 彌陀如來の教に疾ひさ出いて打殺せと騒立を高祖大士はまばしはかせて後御聲まづかに各々  
 しつさらせ給へ今日は法門の爲にこそ御渡りありつらん惡口雜言のよしなきとなりと宣へば本  
 州重過それと下知し惡口もすもの二三人首筋つかんで引出そにぞ漸く事改めて見へにける眞言阿  
 闍梨といとく眞言亡國の證據はいかに大士答て天に二の日なく國は二人の王なし汝が元祖の弘法  
 の大日を崇めて本佛として教主釋尊を侮奉るその邪法なること龍樹菩薩の大論九の卷を見  
 よどありければ又立替る淨土宗南無といふ字の我が宗の彌陀如來を備りたるを御身は盗んで法  
 蓮經の頭につけられたるの其洪音に似合ぬ不手際とわらひ詰るを大士は行り麻の南岳大師の  
 遺法にも天台大師の行法記も南無妙法蓮華經と見へたるの一女不通の育念佛問答無用と認め  
 られ後より出るのたなトく淨土後手は書物をうちひらき物識顔に罵さし出だし和漢に念佛往生  
 したる事書籍に載ていと多かり何を空氣で地獄といふや高祖こたへて念佛一門をひらきたる汝  
 が宗祖の善導の毎日彌陀經三十卷念佛十萬遍を修行し眠らずして三十年又一生涯眼に女人を見  
 逃かゝる行者の身の果の柳に登り頸を結その繩されて大地に落非業の死を遂たる故その頃の人  
 あだ名して柳の自害坊といはれり極樂往生の人といふべきの華嚴經に非業の死を爲もの

多く地獄に生るゝとあり淺問し〜と直達され一詞の〜宗旨のまらず老僧が諸宗の御經を  
 本佛の方便いつはりと言ふへとに佛菩薩のなりものといはせも果す高祖大士遺志を説てこれ  
 と眞實の道に入るを佛の大慈悲方便といふ此事迎經十五の卷梵行品に見へたるを老僧その  
 まで未だ辨へ給はずやと詰かへされ口の針んで身懸り風惑たるのとうち咳人の後香も殺す  
 判劍をもつて瓜を割それより易と鈍佛法二百三首に過す〜て老分の智識色めけば其命のもの  
 尋で尋る幸道心の佛法三昧經を忘れて論といひ論を引て釋といふ大士逸々〜示〜教導な〜給  
 ふにど雲に沸湯をそ〜ぐが如く皆滅落〜と消失て聞しに増る才學の聖人かなと恐をな〜て  
 むもありあな尊〜として落降り人目も愧せ改宗するもまたすくあからず猶怒りまたへかねて地頭  
 本間に妨げられ本意も遂に腹立〜おのれ惡僧願て憂目を見せんと口よつふや〜聞るものり本  
 開六郎重運もその博學智辨に感服し聲振立やよ者等法門に詰りたる者は懺悔〜て聖人の法門と  
 され左もなきものり今は用なし疾退すやと喚はりてその身も既にかへらんとせ〜高祖を〜  
 嗚呼といめ御身はな〜て録行又往給のぬぞ北條殿我が詞を用ひ給はねば今〜彼の地に合戦の  
 たりつらんと宣へ〜重運さ〜め〜す聖人何ぞのたさふといま天下の無事にして弓の袋に太刀の  
 節何と書き〜符をいげんといひ給て立歸りけり廿三日中の刻ごろ日輪ふたつ並出たりとて島中  
 一〜で丸物〜いかなる事の前夜ならんと請らうち二月十八日早船來て京都に破あり又鎌倉にも

軍ありとの述進なり本間重運ありて傍〜鎌倉ま〜り大士の前〜胡腕さ先月十六日の傳詞い  
 ぶやと疑ひ奉り〜又今三十日より〜台せりされ〜大坂古の寄來〜宣ふも相違いあらト念佛無  
 問も一定なるべ〜今日より〜聖人の樹家と成て給のれと合掌す大士宣ふやう我の〜かひなき凡位  
 なれども法華經を弘むれば釋尊の御使あり梵天帝釋も我が左右よ事〜へ日天月天も我が前後を守  
 り天照八幡も頭を垂て我を敬ふ〜まかるを上下萬人これを懸んで失いんとするの唯事ともた  
 もいれずたとへば病ひに正氣を失ひその親をも馬〜うつが如し委〜くは立正安國論もあるして  
 鎌倉殿の御館にさし上置たり合戦の間や虧ん疾ゆ〜給〜とありければ重運經に暇を告一旗郎  
 等引具して太刀と鎧とひ〜めさつ其夜船を飛〜て鎌倉へ走去けりさても宗祖大士の去年十一月  
 より此北海の雪の中〜凍て死るならば一の不測を言殘さんと氷り〜筆を呵〜にあた〜り書綴り給  
 ふやう日蓮の日本國の柱なり魂なり柱倒るれば家傾さ魂去を人驚る日蓮こ〜に在て此經を  
 持ていこそまば〜も此國安穩あるに似たり日蓮去時〜七難競起〜と日本國必定興ふ〜し此經は  
 釋迦多寶十方の諸佛當世日本國をうつ〜給ふ明鏡なれ〜かたみとも見る〜と一切衆生の盲目  
 をひらく大慈大悲をもつて開目抄と名づけ鎌倉の弟子檀越へ贈り給ひける此頃最速坊といへる  
 天台の學匠罪有て此島に流されあり〜が圖らず大士に見天台の法華の正像二千年の用にして衆  
 法本因妙の法華經と經の同一けれども義に相違あることを學び大ひに感〜て徒弟となり名を日

淨と賜りける此日も茲に來て法門を論談し當月五日の曉天明星ふたつ並び出たるも天運  
 異の變なりとかたり居給ふ處へ鎌倉より日蓮上人熊王四郎兩人來て大聖人の慈なきを喜びたが  
 ひに手を取泣給けり大士鎌倉の様子いかにと尋給にされば近年北條長時の次男治部大輔義宗京  
 都に登りて六波羅の北に居又式部太輔時輔は南に居これを兩六波羅とて幾内西國の政事を取行  
 ひ京鎌倉の間飛脚日夜に往來四國九州二島の沙汰居ながらにて鎌倉に聞へ關の東西よく治り  
 諸民心易くありけるまかるに南六波羅式部時輔の最明寺殿の嫡子にて執權時宗の兄なりけれバ  
 我もと鎌倉に在て執權となるべき身を舍弟の時宗に其職を奪れかへすくも口惜しとしてひそか  
 に謀叛を企てけるに其陰謀のやくも露顯に及び鎌倉より早馬を以て北六波羅北條義宗に下知を  
 傳へ時一も二月十一日義宗軍兵軍卒し不意に發て南の館を責かゝる京洛中上を下への大亂とな  
 り式部時輔あへなく討れ家門一族數を盡して討死せり公家にも中御門左中將實隆卿はこれに應  
 じたりとて押籠られたりどきく又十五日鎌倉にも北條左近太夫公時同中務太輔時輔の時輔に一  
 際して執權を討んと計り事も水の泡とて消せん身の果と討手を引受散々に取て討つた  
 れつ修羅閻魔鎌倉中の男女泣歎ひ目も當られぬ騷亂は謀反の類數百人討れつたれ彼も一味  
 かあらぬかと人の心の疑はれいかよ成るべき世の機と安き心もなきにつけ大聖人の御教化に  
 入り人々の兼て仰の自界反逆北條一門の同士打に信力いよく増進せりと日蓮上人の物語り即

新らしく開給ふ折から念佛宗の印生坊といふもの探原も來て三ヶ條の難問を擧たり大士これを  
 さう終り言舌のかたちなり後の證據に立がたしと筆を採て其返答をえるしてこれを見たり給ふ  
 印生坊無念ながらもまた返すべき詞もあく牙を咬で立去ける斯て鎌倉よりの沙汰とて日蓮上人  
 を雜太郎一之谷に移すべきよ一守護所より下知をつたへ近藤次郎清久の承まはりとして新に家  
 を造作四月七日こゝに迎入奉り日夜の食事を贈るこれの信心の供養もあらず守護所よりの扶持  
 方なり此一の谷の地の巖石壁時海水藍を湛へて風景又神妙なり大士時と此山上に登り給ひこゝ  
 に古木の松ありしを深く愛させ給ひ此萬年の縁り我が妙法の榮へに倣ふべいとて毎日此松が根  
 り御讀經ありしかせその松の邊りより清淨なる泉の湧出たり後年此地に寺を建て御松山に相寺  
 といひこれを法衣掛松と稱す總べて諸國御靈場に法衣掛松とよぶもの多し先師の説に法衣の十  
 種供養のその一種なれを大士供養の心もて掛給ひいとわれども其理當らば法衣は僧へ供養とべ  
 き品なり御經よまんとて先我が法衣を脱で僧の行儀を失ふことその所謂無しこれは僧の立倚た  
 るを掛錫と稱する義もて聖人の御法衣を觸られし松といふ意なり歎ふことなかれさても本化の  
 日輪拂法の氷を碎き宗門や此島に流布し信心の數日にいやすしければ生像道觀等會合して  
 評議あすやう日蓮斯てこの島に在ならん國中に念佛の聲絶へ僧も尼も渴命よ及ぶべし此上の鎌  
 倉へ訴て彼れを窄めん事肝要なりと駭合既に一決し念佛者兩三人鎌倉へ出府なし日蓮毎日高き

山に登て天下の變災を降したまへと呪るに道俗男女これと歸依し其祈りの聲一國に轟くとどろ  
 へけるこれに依て鎌倉より近藤清久も仰せて流人日蓮も親しみ交るものゝ重罪たるべきに國  
 中に觸渡すされば鎌倉より替るゝ訪來て御側におゐる弟子衆の食料さへ高祖御一人の御扶持な  
 る粟飯を或は手に分折敷に取分師弟とも漸く露命を預給ふに程なく本間六郎重運鎌倉より歸り  
 來り大士を尊敬すること厚く日ごとくに布施の供物を奉りければ念佛諸宗の惡徒等も今は爲とへ  
 なくそ見へよける一之谷の邑主近藤次郎も此程の一家殘らば歸依の心を起し其子十郎信重極  
 と成て入道一同郡中興といふ地に住居して世に中興殿と稱す今の河原田妙經寺その古蹟なり信  
 重の舍弟一位阿闍梨といへるも眞言宗を捨て法弟となり學樂坊日靜と呼けり時より日興聖人鎌倉  
 へ歸り日持聖人かゝり來て大士にかへつら奉る宮木池上を始めとして檀越の人々折々の衣服を  
 もたらし布施を捧げてその安否を尋ねまじむるものひさま知らずこの地の阿佛坊日得も聖人一之  
 谷に御移ありて路の程もいと遠くありければこの近き日たりよ家と稱へて朝夕は往來せりとの  
 堀と人喚で阿佛村といひけるとぞ今北濱妙宣寺その古蹟ありけり茲よいと感すべきの鎌倉辻町  
 の邊りに朱砂丹を製して世を渡るものありしが夫婦ともに大士を歸依すること厚かりていな  
 る年夫婦死して二歳の女子ひとりありけり頼む方なきうき世の難儀夫婦がいまはの際までも日  
 蓮聖人の佛の再來なるぞ我が亡き跡にも厚く供養し菩提を吊ひくれよかゝとありし詞を身にま

めて大船の記念の女子を抱き海山萬里の辛勞も法の爲にいとつじと遠く佐渡の島に日たり大  
 士を供養し奉りければ大士も驚き感へ給ひ一通の御文贈かいたたけり玄奘三藏の天竺より渡り傳  
 説大師の唐に往し男子なり賢人なり女の身として遠くこの島に法華經を供養し給ふことな  
 るへ須彌山を渡りて大海を渡る人のありとも末代に此女人の見るへからず餘りに感へて日妙聖人  
 と名をまゐらせしとぞ書給ひ日持聖人にもたしめて其旅宿に贈り給ふ日妙は涙ながらに歸り  
 けり同七月の下旬藤四郎といへる人も鎌倉より夫婦ともに渡海して供養をさへく其彼の信者と  
 多く聚りて説法あり折柄二十にや超ぬらん容顏美醜のひとりの婦女紅白の衣服衣紋正しく  
 此島に見もなれず在とも思ひぬ立派法席に列あり聽聞して在けるが説法終て高座に居倚聖人  
 曰くは我に本尊を賜ふれと請ふ大士曰く玉ひければ其書べきの料の紙るいか、の爲と思す處  
 よこれへ御贈り給ふれと紅の袖を押伸てありければ大士御筆を取玉ひ法施し奉る南妙法蓮華  
 經と題し給ふ和歌を  
 紅の袖にも、げー法の華はもく心のうつろへば姫どかきて安藤の國嚴島女と書終らせ給  
 ふと傳授たきて我が神体の人間にまられんことを逃れてや一書に袖挿し西天のるかよ飛ぶ  
 けりる今更國古島嚴島明神の社に此片袖を懸傳へて其女とらふ字の横の一書の筆尾ながく引  
 けりともいひ給ふ又此古島の國を守護す神と大信明神といふ傳と書とりの和蘭通ひ並ふ

七浦あり身延に七面の明神あり誠に二昧不二の威嚴秘密自在の神力といひ知られけり今年文永  
 酉卯月の空の雲間より初不如師はのりきつ寝覺うれしき時を得ていでや本地秘妙の本尊をあら  
 へし奉らんと四月廿五日より青葉の翠を御視よ湛へ觀心本尊抄の一畫をいたり七月八日初  
 大曼荼羅を書あらへ給ふこれを十界總歸命の御本尊とて久遠の釋尊五百廣點劫具する處の十  
 界に於て實相の妙境なりこれ我等衆生即身成佛の本尊にして佛滅後二千二百二十餘年一閻浮  
 洲の内よこれまで決して顯れ玉はぬ曼荼羅なり高祖日蓮大士一世の本懐たり此本尊に限ること  
 觀心本尊抄よつまびらかにしてこれ一宗門の根本とこそ知られたれけし日興日向兩聖人  
 左右よ在りて大士法筵を開らる御說法のトまりけり時に一人の比丘尼高座へ難問を言かけ理  
 も憚らる種々無禮の雜言をいひちらすにぞ大士とてらく勘入てさて宜ふやうひかし天竺の  
 提陀國に摩訶婆といひし外道あり國王の御前にたひて德意善慶と法輪よ及び摩訶婆は實つら  
 れて家よ歸り血を吐て死せり其妻才學遠辨なるものよて夫婦の死したるを深く慟一紅白粉に  
 面を粧ひ鮮綺ある衣服を着飾り夫婦に代て問答せんと左わらぬ体よて其席に入來るを德意善  
 慶よその面色に愁を知り其音聲に歡きを察し給ひ一聲たかく汝が夫婦は論よつまりてはや死たり  
 善慶やと叱り玉び一例もあり今我思ひ合とるよ汝の先頃塚原よて問答よ詰りたる印生坊とい  
 へる僧の妻にして人の群たる法席よ邪魔一理も非もわかす憑口して我に愧をかゝやかし夫婦の

法前なごんととの結構と見受たり印生坊の念佛の利益にて頼もき梵煙を持れたりと仰けるにぞ  
 一應の參詣こらへかぬ咸々一同よ笑ひければ彼の比丘尼の顔鮮紅にして歸りけり  
 當時在世の時王舍城の邸の内人家その數九億ありその内三億の家の人佛の化導を受また三億  
 の家にと唯その噂を聞しのみ次の三億の人一生佛を見ず同一時節に生をうけ同一地に住な  
 ら宿世の縁の爲業として是非もな一如來の說法三百餘會機をどのへ時を浚て四十餘年の後法華  
 經を演給ひ一にさへ五千の僧尼坐を立て返きたり在世すら斯の如し此の末法五濁の關勝るの例  
 の悲業にて信せる者の不測といふべし茲に北條家の一門に北條掃部輔時盛といふ人あり斯は  
 房の子時政の爲に孫にして世に並ならぬ人ありけるが此頃また大崇古の使趙眞彌筑紫太宰府  
 に來り我が國の郡郷山川の事より男女の風俗等まで委しく見聞てこれを記し歸りけるよ一銀  
 に聞ゆ北條時盛ふかくこれを歡き當時の有様たし事にあらず日蓮聖人こそ實に名僧なり我が一  
 門皆これを憑じとこれ天下の大事北條家の滅亡を招くありとひとり發明ありて使を立て佐渡が  
 嶋へ種々の宝物を贈り印檀の契り結び給ひけりこれ後年北條彌源太とて病身なりと世に披瀝  
 して政事にあつからず入道して蓮盛と號し富士山の風景に老の心を養んと駿州に隱遁し専大士  
 よ心を傾け御經いどまなかりけるかくて其年明れば文永十一年甲戌二月八日の事なりけるが朝  
 權北條時宗の夢よ綠色の官服着たる童子來て日蓮聖人を教さずは一門の滅亡近きにあらんと



執權時宗  
夢の告ふ  
驚て  
高祖の  
流罪を  
赦免す

たりけるききききさめて胸打騒夜もいや明たりければ御養所を立出忙然として在ける折平左衛門頼綱出仕せりと聞へけるよぞ御前へ召され刻限の例より早き今朝の出勤ゆゑもやあらんと仰りけるよ頼綱つゝしんでこの四方不測の夢を見はべりよと言せも果てず執權時宗その日蓮赦免の事にはあらぬかと主従たがひに顔見合せ違頭たがひぬ夢がたり辰の太鼓の鼓とどうちひい評定衆奉行人追々館に出仕ありみなく彼の夢語りを傳へさく夢の跡なき思想なるをと生才なまをいふも多かりけれと執權時宗頭と執權は心の影にて精神の感ずる感なれば用世の世も夢を古ふ官人ありて聖人もこれをもちひ給ひさといよく日蓮聖人赦免ときいまりその下知状をかせ宿谷左衛門これを受とり私わたくしの計らひとて其赦免状をひそかに日蓮聖人へ渡りけるこれ日蓮聖人久しく宿谷の半内なまに在ける時光則のトめ其家人までも深く日蓮師の教化よあづかり既大法を信しけるゆゑ半命御免の後も多く宿谷光則の邸宅にわいせしをもつて今日彼の御赦免の状うけられたり天へも登る心地してその御状を願にかけ夜を日蓮師でいさせよと佐渡をさて急ぎける高祖大士の配所も今のなかくに信心歸依の衆多くうきを忘れてけふもまた人々御座室ござむろ築りて種々の法門遊ばしける折庭の梢しほ喜び暗する鳥を御覽ありけるに其願ねがひやかり白きからとなり皆や不密けるを大士の丁ていと諒りやううち給ひ我が洗罪の赦免も近きよあらんか其故は唐土燕の太子丹といへる人ひさしく秦の國こく囚とられとなりてはしけるか始皇帝の臣しんやう頭の白

鴉出たらば赦て國へかへすべしと聞ゆるよぞ太子天に祈り給ひしは頭の白き鳥出たることわり又我が朝は増基法師紀州熊野にて其鴉を見て

山やまがらどかしらも白く成にけり我がかへるべき時や来ぬらんと詠れしともありこれをみて我が赦免あるべき瑞相みずからうにやと覺ゆるなりとかたり給ひき春の日影もたそがれてその夜もや手ての時ちかくありにけりとさに日蓮聖人は漸く三月七日の夜小木濱こぎはまに着船あそ性善坊の家いへ一夜を明し翌日こ、をうち立給ふは御身の疲脚の憫いとをばつかなかくみゆるにぞ性善坊は遠く新町といふ地ちまで見送りまゐらせて別れけり日蓮聖人心の箭長やはずとやれども海山遊う長の旅漸はな々々はなに近づきて氣も稍弛ゆるみて疲をまゝ急ぐとそれ路みちのかかすさすがよ永とこきけるの日も途中ちゆうちゆうに暮くれて夕月も木立こだちに暗くらき爪揚つめあがりり後山といふ坂道さかみちは踏迷ふみまよひ雲尙くもうづむ白妙しろたへに方角かたかくさへもより失うなひ草鞋くさざしちぎれ杖つゑも折れ身体みんたいつかれてすゝみえず側わきの石いしに腰こしうちかけ御師ごしはいつくに在ありて日朝にっしやうにのべるいと聲振こゑ立てやよと喚こゑふ昔むかしの溪たにへつたへ来て路みち續つへたつ十町じゅうちやうあまり彼方あつちの庭にわに松火しょうかをふりてら一日與聖人今宵けふ大士の仰おんがりて最進坊さいしんぼうが病身やまみをいたはりつゝ室むろに送り戻かへり道誠だうじやう心諾こんたつ天の擁護ようごにや其聲こゑのやく耳みみに入いれそれを知るべし山坂やまざかやうこゝよ尋たづね来て御赦免ごしかいめんの事ことをさし喜び泪なみだせさあへす互たがひもなかりけり

此地名を後山といひ坂を今けふ。山坂といふ腰懸給ひし石をば赦免石また開運石といふ日朝  
日蓮大士眞實傳  
百九十五

の徒弟日行聖人その後を慕ひ千歳に御涙の蹟をとゞめ日朝山本光寺を建立し生崖門を築て經を讀此靈石を撫て朝夕先師の靈を思ひ涙をそゞぎひけり

日興師は朝師の手をとり肩に扶け御菴室に立戻り緯の始終を物語りけるにぞ大士のとに歡喜給ひ夜の明るを持って日興を將て新穂の守護所よまらり本間重運よ其狀を渡し給ふ重運取て對れりきり日蓮法師御勘氣の事免詳せらるゝ處なり文永十一年二月十四日行兼清長行平綱承りる左衛門入道殿と讀上けるにぞ大士趣んで承領しこれより諸方に暇を告發足の要意取とにぞありける國中歸依の人うち聚り名殘を惜み奉る中にも一の谷入道清久のわが宿世の障りにや今に家を改宗すると協はず何とぞ鎌倉に歸り給ひ御筆の法華經を渡し給はれと朝ふ又其弟日靜のあまりの悲しさに佛工伊勢小太郎に大士の像を彫刻せしめて開眼を請ふつたへて鏡の尊像といふ最難房は我近頃病にいたく身を苦めたれば餘命もかりがたし再會をもひ絶たりといひさして泣大士も袖をぬらし給ひ我たましく破首よ送ふてこゝに流罪せられはからず法を此處に弘めたりたの〜いよ〜信心をばけま〜大法を讀りたまへ人の命は水の泡消るははや世のならい未來めでたく靈山の而會を期するのみとてうち立給ふ三月十三日の夜羽茂郡護手十四日には綱浦にやどり十五日赤泊なる蒲屋彦右衛門といへるもの御船を供養し奉り鏡を解て浪風穩かよはやくも越後國柏崎に若船ありける茲ふ上陸なし給ひ路の傍に皆神の詞あるを御覽む

つてわたりの清水よ御手をそゞぎまば〜法樂の御經を誦給ひこれより頸城郡府中に宿り給ふこゝに河あり水難度々に及ぶ由聞石磔よ經を書て陀羅尼を讀み給ふ今に此地を陀羅尼町といふ時に一人の仙伏出迎へて請待す其案内に任せて往給ふよ彼の山伏日朝日興兩師の持たる伏包を取て肩よりうちかけ先にすゝみ眞言の朝日寺といふに入奉りて山伏の影をとゞめすなりはけり茲に當院の本尊毘沙門天は行基菩薩の靈作なりけるが此本尊の前に彼の伏包ありけるに住持吉脚大慈法印その不測を拜し慈大士の徒弟となり名を日朝と賜ひ寺を吉麻山日朝寺と喚改めたりそれより信濃路よさしかり吉田といふ山里にやどりたまふ家の主翁芝田右近宿禰や深かりけん受戒して一家烈らず歸依の心を發せしものうへ一人の男子を法弟よ奉る大士喜んで隨身を許し給ふこれ後に和泉阿闍梨日法蓮人として中老の其一人として佛像の彫刻に妙を得給ひ一人ありまて〜も當國に念佛者こゝかに多く奉つて佐渡の國の者どもは言甲斐な〜阿彌陀佛の大敵日蓮を活てかへすとやあるとて幽路よ疎陰よと評讃して途中にうち殺さんと謀りける當國の眞主村田大隅守かねて大士を信してありければこれを傳へさ〜家臣をわまたつかはして路次の非常をいましめ見送り給ひけるゆゑ事故なく武藏國見玉よ着さ給ふ見玉五六右衛門時國その恙なきを渡ひ御赦免を祝し益とすしりてこゝに一夜を供養し明の日は衆川まで送りまらするよ大士悦んで姓氏を衆と賜ひ本尊を授け給ふ衆川邊陀羅尼が關とて今に其名を傳へけるかくて又



兼川の邊りに關普左衛門といふ者あり其妻難産よ昔で産ひを請ふ大士其家に入て祈り産  
 のありけるを取てこれに本尊を書て産婦にいたしかせ給へばたちどころよ安座して母も子も  
 寧ろ一家一門その感應を拜みて一時に改宗せり其飯匙を大士の尊像を彫んで腹籠りとし武州  
 中よ善性寺と建立して此尊像を安置し安産救護の利益盛ありしが後よ感應寺にうつり又故あり  
 て谷中瑞林寺にわがめ利益むかしよかひらすかくて鎌倉の徒弟檀越大士の御教免を悦び小町  
 堂橋の北詰に御菴室を構へて三月廿六日今日こそ御若なりとて我もくど出むかへて大士を  
 茲に入奉り宗運のかぎりなきを祝して一同に掌をうつて流布万年と喜びける四月八日高祖大士  
 を御館に召寄られ上段に執權時宗その外一門列國の大小名左右よ居流たり平左衛門頼綱前  
 ますみ前年よは似ぬ感應の挨拶に時侯寒暖の應答一聖人もつゝがあく一段のよ一禮節終りよ  
 て言やう聖人前年よりの詞地々符合なりたり此うへの彼の大藁古はいつ頃か此國をうつべさや  
 大士答へて經文よはいつと月日の見へねども天の淨怒り烈しく逼て見へはれば多分今年の内  
 あるべし頼綱言やうとは何故ぞや大士かさねて天下の上下邪宗を信ト正法をうとみ給ふよより  
 守護の善神此國を棄てまもらす三災七難たれかこれを防がんぬれ此後天下に御大事あらんと  
 き淨怒りは努々眞言宗等に仰付あるべからずもし我がとばに背き給ひしよく急いで此國  
 へ一兼て前年より言上たるの此一大事なりと席を脱んで宜ひありさまは實に國家の柱助さ

なく殿中まづまりかへつて見へにける列座の中より法門尋ねられしをそれかれと説諭して歸り  
 給ふ今年彌生の初トめより雨氣すくなく旱魃にありけれけ加賀法印定政淨願の任なればとて  
 雨晴ありしに雨の降出けれども大風吹荒人家をふき潰し堤崩れて洪水陸を押關東の田畑と  
 く荒蕪人畜死することればたし鎌倉殿 驚て又大士を召て雨晴の事を尋ね給ふ大士仰あるや  
 り邪なれども法なれば雨の降るべし老か一ながら世を害する薄雨なり此事和漢又例ありとて古  
 き例を引て言上ありけるに鎌倉殿かさねての命に聖人の念佛無間等の法門の道理のさる事乍ら  
 世間を聞て喜ばず今よりそれを罷め給ひ淨所の西門外に新たに愛染堂を建良田一千町を寄附  
 して天下安全の祈願所と仰がんどの台命なりけるよ高祖勤んで諸宗無得道の法門は大慈大覺  
 の根元なり天下の存亡の唯此一事にあり日蓮此國に生れたれば身をば從任奉るやうなれ心の  
 ひまむらすべからずとて坐を立て退出な一たまふ執權時宗熟思これと察したまふに日蓮聖人の  
 實よ末代ありがたき名僧なりことに其の心魂のもるがぬ事武門にこれをいひ大丈夫ども英雄  
 とも稱するの此人の事之佛の淨使なりと名乗も荒涼の言にあらすと頻り感歎あり給へども天  
 下の人の誇りれも一門の嘲りを恥て一心決定あし玉のす去とて棄置も心易からずと宗門弘通  
 の定牒を書て五月二日使者を以てこれを渡し玉よ其狀よ曰く頃年あまた眞法の威力御威最  
 顯一二國比類なき妙宗後代ありがたき尊僧いづれの宗かこれに比せん日本國中に宗門を弘る事

講妨あるべからず城在兵衛軍の日蓮上人と在る月日の下は、開宗の黒印あり、今奥州仙臺講堂  
 に傳來すかくて高祖大士これを見となりて、歎息す一田以我言を用ひずして徒、又此狀を購ふ  
 は筆を取らずして、筆法を學び、筆を服せしめて、留師を頼とするが如し、世を憐れ人を憐る、眞實の  
 事にあらず、唯我が大法に陥ふのみ古人の詞、又疎じべきを疎りざる、これを戸位といふ、退くべき  
 を退かざるこれを懷留といふ、戸位と懷留とは國の倭人なりといへり、三應いさめて用ひられ  
 ず身を退く、先賢のならひなりとこれより、迦世の御志に決心なし、玉ひけり、此夷堂橋の御迷室  
 に寺となりて、妙嚴山本覺寺と號し、身延山十一代行覺院、日朝聖人高祖御眞骨をこゝに分て、東身延  
 と稱す、此東南川を隔て、比企ヶ谷なり、大學三郎能本宅を轉して、寺となし、高祖大士開堂供養ありて  
 亡父判官能圓の法流なる長興、また今年八十歳の母妙本此兩親の名以て、長興山妙本寺と號し、大  
 學三郎別號して、本巧院、日尊と名づけ、大士日昭聖人を召て、御身比企ヶ谷に住職して、當地の弟子、後  
 方を教導すべきより、御願みありけるに、日昭願んで、宜ふやう、今法蓮既に開けたりといへども、諸  
 廟の怨敵、實問をうかり、以宗論に事よせ、權威をかりて、當宗を伐んと討ること度々、及ぶも、一上  
 徳願の方人、わらず、正法も却て辱し、り、うけ、邪宗の爲に、寺を置、一僧を迫る、事もやあり、あんなれ  
 ば、身不付なれども、抽信寺を願て、後土に居り、甲府を統とて、身を安んせ、宗門不時の法取、あ  
 らん時、後谷より、討て、出、其、事、一取、て、一、す、れ、ば、よ、や、無、法、の、理、議、を、受、る、と、も、我、身、ひ、ど、り

の事より、宗門と寺とは、怪我のわらう、大聖人ふかくこれを察し、給れどありければ、大士も昔の約  
 束を忘れず、飽まで宗門の後殿する事を感下た、まひ、日朝を以て、妙本寺を住職なさしめ、給ひけるこ  
 ろ、日朝聖人の法弟、日澄、剛の、小町、正覺院といへる、眞首の寺ありければ、唯一人、ひそかに、離向ひ  
 一問答、又、攻落して、寺號を、大巧寺と改て、先第一、此企ヶ谷の末寺といひ、なしたりける、時に、宿谷左衛  
 門光則、入道して、西僧と號してありけるが、大學三郎が、其宅を、寺となし、たるを見て、我が、郎の、うち  
 に、一寺を、建立し、父の名を、山號と、我が、名を、寺號と、して、行時、山光、則寺と、呼び、日朝聖人を、附して、開  
 山と、仰ぐ、昔の、怨敵、今の、檀越、實は、邪正一如の、大法といふ、つべ、高祖大士は、數多の、檀越、我が、方へ、御  
 入あれど、皆口々に、御勸めありければ、應へ給は、老翁の、約束なれば、とて、波木井六郎實長の方へ  
 志し、甲州身延山へ、赴き、給ふ、五月十二日、諸方へ、眼を、告げて、既に、打立給ふよ、と、老若男女、御名、残り、と  
 を、いみ、送り來るもの、ひさも、さら、三里五里の外に、別れを、悲し、み、猶、忘れが、たく、て、巖に、敗、ち、丘に、登  
 りて、御後影を、拜奉も、多かりける、隨徒に、日興、日向、日頂、日持、日趨、その、余久本坊、彌王四郎、を、附、奉  
 りける、その、夜は、酒匂に、一宿な、給ふ、野度山、法船寺、その、跡なりといふ、十二日、駿州竹の下、鈴木、八  
 が、供養を、うけ、給ふ、十四日、車返、十五日、富士の大宮なる、遠藤左衛門の、家、に、宿り、給ふ、夫婦、別んで、書  
 施の、鷲目一結を、さ、げ、又、柏餅を、獻、し、酒を、勸、む、これより、里の名を、柏餅村といふ、鷲目山、本光寺とい  
 ふ、寺あり、此日、大宮の、莊野、中村なる、田井五郎、受、贖、して、懷越の、眞りを、歸、ふ、この、人の、富士郡、長、實、河、命

を領するゆゑ世に河合入道と稱す今その地に河合山妙光寺あり十六日内房にやせり給ふ爰に一  
人の老尼あり當郡大鹿村なる三澤小次郎の叔母なりけるが兼てより大士の高徳を歸依してあり  
ければ一室を淨めこゝより大士を請待し種々もてなす奉るその夜潮々の水聲をうかき月かげれ  
もしくく溪川は浮ひ山里の風景みこゝろよや協ひけん

至臥ふす夜のあまり寐れねば月を身延よ起かへるかなと一首の歌を口吟給ひ一後年日蓮  
聖人もこゝに月を見て

谷川にうつる今宵の月影とうつふさに寐てあがめけるかなと詠たまひ又草山の元政聖人身  
延詣の時この地にやせりて

うつふさは寐られぬものか片敷の枕の山の山不盤の老ら雪と詠ト給ひ一これを内房三昧と世  
は稱すいそ高祖の靈跡をとりめて長遠山本成寺といふ一寺ありさて高祖大士はこれより甲州  
の地に入り南部の眞言寺に一宿なし給ふ住持大輪法印その徳を感服ト改宗して名を日蓮と賜ふ十  
七日相俣といふ處にいたり給ふ山水の美景あもいられざれば石は腰うち掛てまば一休らひれ  
はしけるに此近きあたりやすむ正右衛門といふものゝ妻なりとて山家のならひ頭の方へは飯櫃  
をいたし頼て大士の前におろし粟飯を奉る大士ことよ喜びたまひ各居並んで給終りしに又一  
條六郎信長と云人あり茲地は住居するゆゑ人呼んで相俣殿といふこれまた波木井殿の一族にて

ありければこゝより子息太郎光家を案内にさしそへて送り奉る波木井六郎實長はその一門師依  
の者を作ひ遠く途中に出迎へその歡喜大かたならず先波木井の邸宅へ入奉りこれより六郎實長  
の地割をなし繪圖面を授け相應ある一寺を建立せんと企て玉ひたるを高祖は堅く辭退なし我が  
意を協ふ極の斯ありたしと御望ありければ波木井殿も力なくされば實長に任せ奉らんと番匠三  
三人木を伐芽をつかねいさゝかななる御菴室をぞいとなみはじめけるかくて大士のまばらしく波木  
井の方にねりけるが當地より程近き小室といへる處に慧長法印善智といふ才學の修驗者ある  
よ一閉たま、五月雨の雲吹はれて青葉に薫る風いささよく在ければ日興日向の兩人を伴ひ遊び  
がてらに彼處にねもむさあたりの石の上に御腰うちかけ讀經ありしを善智法印聞とがめてこゝに  
来て法論に及ぶ善智たちまち説破られ閉口して徒弟となりん事を願ひけるまたこの小室といふ  
地の水田に蛙ねびた、くわりて畔を塗野夫苗うゆる賤の女か手足に嗽入血を流し見る目の  
ふせく思し召大士田の畔よ立てまば一御經あそばしける是より此地の蛙の人よつく頭に一點の  
星ありて世に小室蛙といふ傳ふさそがよ山里の夏も木蔭の涼く思とす坐に路を徒行石和と  
いふ地よいたり給ひし頃此程の空の辨とて俄よ雲立雨ふり出しかせ宿るべき家さへあらずまば  
一巖隙の雨やせり日暮さして入相の鐘もかすげき山河の流れにうつる灯火は人の住家と覺ゆ  
る一夜の宿をたのまんと河原づたへよあゆみ給へば瘦枯たるひとりの老翁身に襦衣をまどひ

つ、出迎へこなたへ入らせ給はれとありて、置の朝戸もまづらよて人そむべくもあらぬ姿に伴ひ  
 まらせ我の鶴飼を業として物の命を取つゝも唯一筋の玉の緒をつなぎ兼たる惡業人聖人何と  
 ぞ我を憐れみ此宿業をたすけさせ給はれと合す掌さへもいと細く滅なんとする燈火の火影よふ  
 して泣まづむ大士はこれを不便にわづらひ経まづかによみすまゝ給へば彼の老翁も苦痛なる聲  
 細々と共に御題目唱へけるがまづりて大士を伏拜み御經力にて業障の闇もれ菩提にさるる  
 雲もな―これみな聖人の賜なりと喜ぶ聲も山川の氷の音さへ小夜ふけてさゆると見へ―燈火  
 の岸のはたるの影落て明方ちかくなりにける四邊はひろき河原にて宿り―家の跡もなし日興日  
 向もともも望然としてありければ大士のあやしみ給ふ氣色もなく斯の孤獨地獄として殺生人の落  
 る地獄なりとて茲又三日の間御行をどいめ給ひ磔に御經を書もて川に投沈め給ひ―其納經濟度  
 の禮跡を鶴飼山邊妙寺とて今又石和に残りける夫より北原を過給ふに胎藏寺といふ百の寺あ  
 り地蔵堂の側の石に老―休らひ在―たるに畑うつ農夫秣村童なぞ立寄りければ高祖安國  
 論を取出して説法な―給ふは信心を發し題目を唱ふるもの多―それより此地を休息村といふか  
 くて金川原の里岩間平兵衛の家に入給ふに、此地の領主米藏丹後供養をさゝぐ夜に入て八代よ  
 かり給ひ―に、撥まげる杜蔭に鬼火隠々としてもゆるにぞ其夜宿の主翁にかたりたまへを近き  
 頃學子を産で死たる婦人ありその靈魂よ―べるといふ大士ありれんで回向な―給ふ今に二子嶽

と傳へたり西平より日野にいたり給ふに丹下といふ老人杖よすがり井戸を隔て彼より聲かほ  
 て日蓮聖人よ―在さずや日もこや實音近しと、懸よ止宿をすゝめ奉るにぞ此家に三日滞留あり  
 て説法教化なし給へりはトめ請待の時井の向ひより聲かけたればとて姓を向井と賜ひけるそれ  
 より信州高木に弘通すその跡清淨山眞禪寺といふ又甲州甘理を過給ふに雨俄降り出ければ松  
 の樹間よ雨やどりな―給ふ法永山本照寺その古蹟といひ傳ふ入代郡山梨郡付州諏訪郡高木まで  
 遊化な―給ひ日數凡廿日あまりを歴て六月十七日波木井よかへり給へばかねて聖人の御指押に  
 まかせて營みたりとて身延山の麓深川にそふて柱は五つか十二本三間四面の草堂の茅もて葺る  
 所ふかく興まりたる中央に須彌壇を立て本尊を安ト香華清らかな燈明を點じ南に初代の日蔭を  
 覆ひ書を讀窓あり物書べき机もあり北の庇よ香厨をもうけ側よ夜の具ねさむべき柵も營なみ  
 庭に眞柴をかきと結めぐら―樹々の藥草を植其外中柵撫子千日紅なほ何くれと時の草花を多  
 く植ならべ―は佛に供する料なるべ―高祖大士の御覺かぎりなく茲に入て其因縁を愛―快  
 く御經讀誦在ま―ける久本坊日元のかひ―くこ―よ事へ奉り峰に登て新を深溪川よ氷を汲  
 炊といとなみ浴をそゝめ朝に花を摘夕に佛燈を點し席を消め庭を拂ふこれを佛門の八役といふ  
 日元よく懸よ此八役を勤めける抑この身延山といふ甲斐國巨摩郡の分内にして大檀那  
 波木井六郎左衛門實長の邸宅より成塚に當り本化の蹟をどいめ給ふべき靈境よ―て北よ―白根

お後續してて天よ舞へ南は鹿取山とて天竺の彌足山の如く西の七面山とて鉄門に似たり東は  
 又子が嶽たかく雲を帯きた北に早川南に波木井川東に宮士川西に大白川この四の山四の流れの  
 中央の身延山にてそのうちよき事ばかりの平地ありて、又新野御菴室より高祖大士朝に日天  
 聖を拜し日課とて御經一卷その餘方便書量所持寶塔なを御意にまがせて讀誦あり日中よりは  
 佛角檀越のために一乘の妙理を御演説夕暮よと一座の僧俗を圍居て修題目の御修行なり夜はこ  
 ろらに觀念の床よ一念三千の妙境を觀下但見妙事の夢を結ひたまへを妻戀鹿のよびまきりに  
 御眼をさま一我等一切衆生我が身のうちに三觀一心の月曇りなく澄けるを無明深重の雲よひさ  
 覆われ流轉生死の凡夫と迷ひ果一事を思召さくけて和歌を詠給ふ

たち渡る身のうさ雲もわれぬべし妙の御法の懸の山風と遊べして佛乘を讚歎あり給ひさ高  
 麗此山に御入ありてより歸依檀越の布施を受るとを願はず法子に命て山麓を働いて菓を蒔菜を植  
 専一耕作を旨とし榎の實を採柴栗を拾ひ四季折々の木の實を貯へ給ふ波木井殿もその御心を  
 一人知す麥稗大豆なよくれと密よ香厨に入置て大士よえらせす又高祖大士は御馬を好ませ給へ  
 ばとて御菴室の側たはらのに厩うまやを立たくましまし馬を養やしなひ其御意を慰なぐさめ奉るまことや如志寶樹は萬の寶を  
 購かひす遠國近郷をいはず信心師依の方より日よ夜よ衣食財産の供養雨と降り雪と積天上の福天  
 外界の去者とぞれもわれける一日天氣快晴ければとて兩三人の法子を伴ひ荆棘を拂ひ險巖を踏

んで身延の峰に躰たはらの登給へば長天雲消て眺望かぎりなく東の方遙かに見やり給へば伊豆相摸の山  
 やを越て一筆ひける淡墨の如き房州の岬なり大士思はず御袖をまがり故山の空なつかしく雨  
 霧の在せし昔を思ひ出まべし御經遊べけるが此峰は御菴室より五十餘町天の梯道もなき  
 險阻なりまを折よこ、に登り御兩親の廟うらみを遙拜し追慕の泪をそそぎ給ひける大舜は五十に  
 て父母を慕ふ大士六十にして二親を戀させ給ひさ内外南典もと二つなく大聖至聖其道一なりと  
 を思ひければ此古蹟を奥の院と稱し今に思親開育恩堂の名を残せりけふも上野なる南條兵衛  
 殿酒二筒椰子一籠蓮藕せんにん割牛旁品せんにんとを家の僕にもたらしつ御菴室に訪奉りて此程大元聖古九柱  
 にねし寄天下の大事に及びたるその顔末語られけるこよ去る十月の五日對馬國上縣郡國分八  
 幡宮の神殿より火焰立上こと數十丈國中これを見て出火ならんと馳聚たるも何事なしこれいか  
 なる事の前表にやといふ問もあく其日の中刻對馬西の海上黒みわたり蒙古の世祖忽必烈の命と  
 して鳳州の經畧史折都を大將とて高麗の總官洪茶丘を先陣とて其勢合二萬五千餘人兵船九  
 百餘艘當國佐須の浦よ押進たり此津の守護代和馬之允助國手勢を引て馳向ふ處若岸ありたる七  
 八艘軍卒凡一千ばかり險に上りて守護代が陣へ押かゝる相馬父子其外宗徒の者討死して敗軍に  
 及女蒙古の賊軍處よに火を放て狼藉すこのよ對州より博多に往進す同十四日渡岐國よ取津赤  
 旗をひらめかして上陸し一蹴く攻伐にぞ當國の守護平左衛門尉洪隆協すして城内よ自害して

相集たり賊軍勝に乗て筑前今津より箱田箱崎に逼る九州には東條大友白杵松浦の面々菊池原田  
 兎玉の一黨備へを繰出して合戦を挑めども賊軍の進退自在の勢勢といひ殊々陣中より雷電の  
 光をなして大ひなる鉄の玉を飛す我が軍兵その玉を當れば粉の如く打碎かれ又驚愕るもの  
 を知らず忽ち蒙古に退立られて敗走と菊池次郎康成赤坂の松原に踏どまりければも一丈もこ  
 ちへ廿九日に至て東郷覺忠の子三郎景賢大友直泰兼成在助菊池康成を始め討死の勇士たびた  
 しく今は誰有てこれを防ぐものなく蒙古は八方より亂妨し男をば打殺し婦を縛り船へ送る民百  
 餘逃越ひ山中の樹の茂り谷間ひ岩陰より親子兄弟聲を呑氣息をつめてひそみ隠れたれども火の  
 煙りを見て賊卒ども其隠家を探りありくにぞ是非なく米を咬水を飲で日を送ることよ哀なるは  
 期山中に隠れたるをも赤兒の啼聲に尋ね出さるゝのゑ家内七八人の命に替がたりとて見を結  
 縛より谷川へ流したるも多かりけるとぞさればこれらの有様を聽畏して親を負子を懐にして  
 を隅りに逃去て此三四十里の海岸よは居るもの絶へて一人もなしこゝにわいて賊軍をも心のま  
 り金銀米穀を取あつめ九百餘艘に積入ていつしか出帆して幾りあき歸りしを知る人さらにな  
 かりける京都鎌倉に合戦の用意とりくみありしも今い徒となり此うへいかなる世にか  
 成ゆくらんと上下万人浮雲の思ひに佳しけるかゝる天下の騷亂も安國論に符合なすをもて法皇  
 權懸はよく信心の色を増高麗大士は浮世の安危を余所見て此身延の澤に光をかくし

唱題の外さらに他事なくわいけるこゝも房州天津なる光日尼遊く使を奉り我が子彌四郎その  
 主人の爲よ人を討て自殺なしたるより布施をさへげて回向を願ふよぞ其彌四郎も一度我が教化  
 を受たるものなりとて懇に迴福を當み給ひけり又今日れとづれたるの權池四郎とて鎌倉河越  
 の官吏なるが深く大士を歸依しいま遠く安否を此山に訪奉る時に波木井殿ひとりの尼を伴ひ奉  
 りこゝ我が發女にて駿州江尻七村の邑主村岡民部に嫁したるが今い夫婦は別れて別離せりと  
 て受戒を願ふ妙圓日義と法名を賜ふ文永十一年も雪の中も暮て明れば建治元年乙亥二月十六日  
 房州東條の新尼より使をもつて布施を奉り甘海苔一袋をそへたり大士これを見そなはし我幼  
 かりしとき悲母小湊の磯に此海苔を授給ひしを稚心にねばへたり海苔の色香は今も同一けれ  
 ども憂世のさまのかかり果たるなぞ御書を讀て贈り給ふ春も半途は過ながら山寮の暈り梅の  
 花や咲匂ふ香をとして日朝聖人ひとりの兒を携へて登山し春の詩詞餘意の挨拶いひのふれ  
 大士喜斜ならず寒さ凌げと波木井よりねこしたる油の如き味酒に幸ひ糸に土常師昆山の堂  
 たるもありと土器出してもてなし給ふよ日朝聖人の會釋して此見の下總國葛飾郡平賀忠時の一  
 子にて名を萬壽磨とよびのべるが此月の初めつかた其父携來て徒弟なしてよとありとへ  
 許して比企よとどめりしたれ今年七歳に齡ませて末頼く覺ゆるぞ伊師の見参にも入受戒をも  
 願ひんと遙く伴ひ登りしといひ述るを大士は見か手を取て伊藤根よ居らしめ給ひ容貌骨格凡人

ならんこれ我が弟子なり必ず我が法を弘むべしと御經を戴かせ今日より經一磨と喚んぞとて其儘身延山よとぞゆれき學問修行怠らず聰明絶倫にありけるか後年肥後阿閉梨日像聖人として法を京都に弘め給ひ一は此兒にぞ在ける卯月十六日佐渡國より中興入道信重身延山に登て一の谷ある法華堂も今の寺となりぬ寺號をつけてたまひれど願ふにぞ大士妙法華山妙照寺とある一て給ひけり此五月大蒙古國又杜世忠を使として日本を和陸せんことを言越たるを大宰府より鎌倉に送りけれども事ならずして歸國せしよ一駿州の大内安清來ての物語なり此頃高祖は撰時抄二卷を著して大法流布の必也時依ことを志たしめ鎌倉の御弟に贈り給ふ折から下總太田の曾谷次郎左衛門教信先年佐渡より渡り給ひ一觀心本尊抄を拜み述門無得道といふ文を見説り法華經の前半分をば讀ますとといふ富木殿種々に言諭せども心解す困つて十月三日此事を身延に告奉る大士直々筆を採てそと不相傳の惑ひなるよ一細々またため得意抄と名づけて是を送り給ふ曾谷教信深く先非を悔みたり在世の時既斯のこと一十滅後十九年中老天目聖人勝劣の義を立てより八十餘年の間に諸派の勝劣を以て發り本化一味の海も多端の波を發したる事歎かひくぞ思ひれゆる又佐渡に在りたる時徒弟に属たりし最蓮坊日淨その身の罪も御赦免ありとて御後を慕ひこの山に來り程ちかき下山といふ里に巷を結び日夜に高祖を前まわらせ法を聞とを身の樂とせりその遺跡のこりて下山長榮山本國寺といふなり樺の柱に遺跡もいろづく秋の末

つかた庭の切戸より入來る人あり誰をとわやみ見玉へばさいつ頃法論にうち負て膝を折たる小室の山伏善智法印手に提重と持ながら席につき一別己來の應答も眞綿に針のねんごる振この愚妻が手搦の餅たへて久しき音信のまるに携へいべるか一味なくもさこめせとさ一出すと高祖はよるこばしきよ一應へつ、庭に馴ふす白狗を縁端たいて來々とよび此餅ひとつ投與へ給へを尾を揺ながら吠ふと見へしが忽四足をふるひて血を吐て死てけり善智の面色土の如く消も入たき風情にて我先年法門にうち負て口には法弟と名乗ながら心の解ぬ裏表聖人を尋ねし奉らなくも早く知石賢明不測の大聖人ゆるさせ給へと庭にわたりたち五体を大地へうちつけく懺悔の本心あらわれければ大士も不便なればしめその滅惡魔の心に入一業にして御身にたへて答わらず我此頃のよみうたに

かのづから邪にふる雨のあらト風こそ夜の窓のうつらめと詠たるぞと惡氣入其身の法門より逆即是順の理を教へ名を日傳と賜ひかの狗の横死を憐れ卒都婆を立て供養なり給ふ彼の小室の一村もこれを見聞て改宗の者多し善智日傳は家を轉トし寺となり徳永山妙法寺とよび又最初法輪の地も寺を建妙石山懸腰寺と稱し其身の身延の山内に移り巷を結んで朝夕大士に事へ奉り身の罪滅を祈りける其地を醍醐谷といひ巷を志摩坊とて今は残り十一月の末つかた下總國富木殿より慈目一貫文厚綿の小袖一笠十管墨五挺あるくと贈り越したる親慈のかとづれに今

年もくれて建治二年丙子の正月雪踏分て南條殿餅七十枚箱一筒芋一駄大根河のりなど春の祝ひ  
 にこれを奉る松野氏より柑子一籠種々の供養をさし別て此頃春關て厭澤なる大井庄司が方  
 より乾柿三箱酢一桶莖立土筆る春の氣色の贈りものに山中もや御心のどかに日を送り玉ふ  
 處に上野殿珍しくも音信玉ひ亡父の追善の布施なき取崩へて幸り種々の物語りうち交て法華經  
 は未來の成佛は一定とこそ承れ現世よりさまでの利益の在るにやと尋ね玉ふ大士のうち  
 嘆嘆たまひいやとよ現世の業未來の米なり未來の米のよく實る程ならば現世の誠の英事なるべ  
 し昔九州に大橋太郎といひ諸侯ありけるが鎌倉右大將家の御勘氣を蒙り鎌倉へ召下りあま  
 の悪さに土の密に苦め年を歴て後に殺せと下知ありける時までに重き罪と知らぬ火の筑紫  
 に殘る其妻は懷妊してありけるが今の知行も没収せられ一族家來も四散になりゆきてたのむ方  
 なさむび住居歎きのうち月滿て男子出生有けれバ夫の記念と育揚名を一妙庵と呼びて七  
 の時に山寺へ登せ手習學問そのうへに夫婦の常は信ト臣ひし法華經を讀ならし玉ひけるよ  
 日泣々家よかへり母よ向ひて尋るやう朋輩の兒連童子等が親なり子よ親なり子と罵り笑ひつ  
 るか一我父のいづくに在すぞ天なくては雨ふらト地をければ草木も生を我が母ありて父の亡  
 とやある在すかたを教へて給はれと問兒よりも問る母親胸にせら來る血の涙かくし果べ事  
 ならねば涙を押へてさればとよ御身の父太郎殿鎌倉殿の御怒りに値敵に強引に昇聚られて

彼の地より下り給ふ時御身の此母の胎内より其子の行末願ひとぞ唯一言を此世の名殘を  
 より絶て音もせず殺され給ひ一沙汰もさこへず又生て在す時もなく夢さへ遠き東路の職にだに  
 も知よしなく願ひの御身たひひとり父上の朝暮に讀給ひ一法華經といふはこの世のちの世渡か  
 らぬ功德とさして御身よならし一萬よひとつも父上の生て在すバ其身の所請死たまひなを追善  
 と思ひあきらめはべるか一と語り給へバ一妙庵のこれより先よ立かへり一心不亂法華經一  
 口誦よまでなりけれバ十二歳のとき母にも告すたひひとり鎌倉に下向一鶴が岡八幡宮に通夜な  
 して父の安否を知らし給ひれと御神前に祈念しつ御經を讀すまけるに其音律微妙にして金  
 の鈴を振が如く珠を轉す妙音自在樂韻の男女れもいす涙はふり落かへるを忘れて聴出し神前の  
 群衆ハの山をぞなしたりけるかある處も御臺所政子の方夜に入り御忍にて御參詣あり廻廊より  
 御内陣にすんで御拜ありしに折節彼の兒の御經を聞給ひあまりの尋さよ御師館有て右大將殿  
 おかくと御物語ありけれバその明の朝彼の兒を召寄御持佛堂にわいてこれをよまめ給ふいと  
 不測ある梵音摩骨身も徹る御經の涼さ塵にうつ、あく御聽聞ありける折から御門外よひかに  
 影しく人聲するよぞ兒の聲も御經よみたり左右の人をかへりみてあれ何事ぞと尋ふにぞされ  
 ばとよ今罪人の頸を切とて町々をひき渡すなりといひけれバ思はず兒の聲を揚て泣けり子細や  
 わらん其を語れと仰りけれバ泣々語る父の身のうへはや殺されたまひしや未だ活てまます





善智法印  
高祖を妻殺  
せんとして  
却て化導  
あづかる

か八幡大菩薩の御まこと一を願はんと地持を請にてはべるなり我父も思ひ合せて人の願切ら  
 といふがかなしく覺ゆるありとありければ右大將殿いそぎ宛原景勝を召れ前年汝に預けた  
 大橋太郎のいかげせーやと問給へばその大橋こそ唯今町を引いた一歯比が渡にて死罪に行ひ  
 べるより官上と右大將殿いそぎ其罪人を助けよと宣ふにど宛原景勝を飛せて大橋を運來り  
 大將引居たるを見るに十二年土の牢に苦しめられ糸を以て瓦を繋ぎたる横に渡はそりたるを  
 ふとら荒縄にて小手高くいまいりたり右大將殿見をさし招き給ひそれの汝が父あるを極をとい  
 て逃戻れば経讀たる布施なるぞと仰ありーかば一妙磨の夢かとかかり高棟より飛下りて慈父  
 一と絶りつく太郎もいりて我が子あるをさし手に手を交す親と子が降の涙の玉袋袖にのみ  
 て見へにけり御籠の内に在ま一たる御臺所を始として並居席の大小名泪にくれて同なし右大將  
 殿仰にの世も母さの法華經なり我朝敵を退治して父の怨を討天下は權柄を取て美名を四海に  
 輝すかとは伊豆國煙が小嶋の配所に在いて法華經八百部を讀一功德なりと昔の經力今の功德ね  
 もひ合て大橋太郎に本の知行を興へ給へば父子いさんで築紫に下り再び家業の業へたるのこ此  
 證の利益なりといと長々しき御物語よとするの日脚も短くればへ茲よその日も暮にける同月八日  
 の事ありき富木殿その母公九十三歳よりて逝去ありけりとして自らその遺骨を持て身延に登山  
 高祖の引導を願ひこゝに塔をたて其寶塔の前にて大士の御手を尊りて湖鏡一名を常忍日持と號

め歎のうちよ喜びの泪を交へ下總に歸り給ふに程なく平賀左近將監忠晴一子龜田磨を供の男に  
 負せて御庵室よ尊奉り聖人の恙なく渡らせ給ふよ一は途中に富木氏の歸るに値て承はりぬとい  
 と懇に挨拶さしていふやう此兒の經一が弟よて今御五箇にのべるが兄を逃ひて泣くらざこれ  
 宿縁とれもひさだめ法弟の數に願ふといるゝ登りまわらせたりとありければ大士許して徒弟  
 となり給ふこれ此企谷第三世日輪聖人といひ一學匠なり雖に一人の道心遠く房州より來りよ  
 一一封の書通をさし出ーける高祖封れさりて開き見給ひよ此三月十六日清澄の道善の功  
 化のよしを告るす大士これを見てかなしみまたへ給はせ去る文永甲子の秋華房にて對面しま  
 らせ口に苦がる良藥の我が法門を問召いさ、か師慈も給ひてーそれより今よ十三年むかー忘れ  
 ぬ師の恩と縁かへーつ、その書を頼に當て悲み給ひ孤はその住塚を後になせす白鳥は毛茸が恩と  
 報ず畜生すらかくの如し佛法を學んもの報恩の志なかるべーやと別室に籠りて報恩抄二卷を  
 らし日向日實を御使として清澄よつかいー給ふ兩人の道善坊の御臺の前よその書を読み上て  
 亡靈を吊ひ兩脚また一字一石の經を書經標を築て阿山さー此精を大士に歸り奉りければその御  
 喜色に顯れけりこゝに日朗聖人の慈母妙一尼遊々身延に登山一種々の供養を奉り佛法の大事を  
 問ひ給ふ序次此程蒙古よりの使節九人を長門の國司より鎌倉に送りたるを籠の口にて九人の願  
 を刻て由比が渡に鼻首たるよ一遣すがらよ聞たるとして歸り給にぞ高祖大士の左右の法弟をかへ

りみて鎌倉殿我が首を用ひ給はずそのうへ罪なき異國の使を戮したるの何事ぞや見よく災害これより起らんと眉をひそめて歎きふ處に池上右衛門大夫宗仲れもひよらず登山有ければ大士よろこんでまばらく此山に逗留をすしめ給ふ宗仲も大士の御意に背かどとこ、に越前御側に事へけるが大士の常の御膳部に、藜の葉野菜の扱煮菓種は乾減るを炊き難へたる鹿食をなし給ふを見て宗仲頓て家にかへり其妻其子も詰ていふやう久しく身延山に在てその朝夕を拜しまらざるは厚味を食し衣煖かよ熟若て身を安逸とするの菩提の道にあらま我師末法の導師にて在す身の法の爲に其身を苦しめ鹿食よさへ猶飽たまはずいと勿躰なく覺ゆるをわれけふよりこれにならんとして一生その行を改す在一けるこ、に駿河富士郡に眞言宗の檀所涌泉寺といふありその學頭五人身延山より昇て難問と大士一言のもとと説破り給ふよ五人の口鉗で噤の如しそのうち一人の僧同郡賀島の住士熱原甚四郎國重の子なりその座をさらまして法子とある越後阿闍梨日辨といひ一は是なり又下野坊日忍といふもこの日辨の肉縁の舍弟にぞありける父甚四郎國重もこれよりふかく宗門を信し富士郡信者の上頭たり此頃高祖を賀島へ請待なしけるよよつて日辨上人を名代としてその地よつかり又日辨日法も共よゆきて其化導を扶けしめ給ひければ富士の根方にいよく宗風かややさけりこゝにまた中老日法聖人常國北原の修驗者宥純法印を伴ひて登山し此人の先年甲戌の春聖人路傍の石に腰うちかけて安國論を説給ひしを聞て縁となり

此頃我に隨て得道を願くは師の直弟となし給れどありければ授戒して式部阿闍梨日乘と名つけまた住居の寺を安國山立正寺と號し日法聖人を以て開山と定め供養を送しめ給ひけり又此日乘の門派に空存といふ僧あり日乘の事を聞て直さま身延より改宗して徒弟となる惠明阿闍梨日春是二此頃の秋の初風吹立て衣冷しき朝宵のかゝる時候の隙もや大士の御意例ならず日を經て御身憫ましく稍百日余りの病惱にひき籠りて在しけるが四條頼基信州殿岡に在てこれを傳へ聞急ぎ登山して御脈を診へその脈を調つて歸りけるが其後老のし御僧信も聞へず頼基思ひ煩ひて殿岡より錢三貫文白米一俵餅五十枚酒大筒一小申の柿五把栴檀の實十箇これを使にもたせ御安否を問奉る大士とに喜び給ひ飲食と醫藥にまゐたる實はあらど御藥にて所勞も速よ平愈一本より一深く成はべりぬ今又種々の食物を贈りたまふこれの釋迦佛の貴邊の御身に入替て藥より常の食物まで供養し給ふにやと御悦びの御書をれくられる此秋より日興聖人も病ひに依て大士またべりの暇を請伊豆の熱海の温泉に養生して在しけるが此地の走湯山の蓮藏坊博學の聞へ有ければ一日病の快氣よまかせその人を尋て法論に及び忽に説伏たり其時蓮藏坊の弟子あり奥州常陸郡新田の領主五郎重綱の子にして頗る才發りも側に在て此問答を聞て改宗し日興聖人に伴れて身延山に來り高祖に隨身して名を日目と呼後年日興聖人の命を受けて富士大石寺に主職せりかくて建治三年丁丑の正月帥の阿闍梨日高喜大士に告奉るやう久本坊日元禧冬より病苦に閉られ御菴室の奉公見るも苦しげなり我無量罪滅のため一千日の間八役を勤め氷を吸嚼を

横て河私仙人につかへて千歳の修行を爲んとす許し給はんやとあかければ大士その心に任まふ  
 ひこれより久木坊又替て給事奉公厚かりける時又下山村の邑主兵庫頭光基といふ人あり一字の  
 堂を營で阿彌陀如来を安置し因幡法印といふ法師を請待して供養を遂たりこの俗近來高祖の  
 宗道を信するたるをもつて其供養に法華經を讀けり下山兵庫甚だ不興ありけるゆへ因幡法印  
 かねて高祖の認めたまひたる一巻の書を取出して兵庫よりまゝ又念佛禪の諸經一應の往生成  
 佛のやう見ゆれども實は人の救濟する經にあらず日蓮聖人の歌に

蘆の葉のかたち船に似たれども難波の人を得しと渡さねと詠たまひも其教法の知ら

れいへると深切な説諭すまを兵庫のはためて夢の覺たるごとく改宗して大士の檀越となる寺を  
 建て平泉寺といふまでも此頃鎌倉大佛門前桑が谷に在りて京都叡山の伴龍象房來て説法し諸宗  
 又法門の不審あらんものは尋ね問るべしとありけるにぞ市中其博學に感し生佛なりとて日々  
 群衆潮の沸が如くこゝに三位坊日蓮聖人十九歳折ふ鎌倉ありしが彼の龍象が邪説の鼻を洗  
 いで鎌倉中の目を覺さんと桑が谷に赴たるは堂内の聽聞人爪をも立ざる參詣なり日蓮師の縁  
 の端に居てこれを聞居けるに佛法の事に疑ひあらば誰にてもこれへ御渡りあれと再三さこへけ  
 れ日蓮公のあまたの人を押分て高坐の前すし凡佛法の一道よてあるべきを今の諸宗と立  
 わかれ河れを如来の正法とも分がたし後世の大事願はくは教導にあづからん龍象答へていふ諸

衆いづれも正法にて成佛得脱の道なり日蓮公かかねて宣ふやう聖人は何れも成佛得脱の道と  
 のたまへども佛の御心のまからず一乘の法のみ有て二もなく三もあらず又正直に方便教を捨よと  
 説四十餘年の經々の未だ眞實を顯さずとも説給へり聖人の御詞と如来の金言と天地の相違ある  
 ついかんと二言三言の曲答にま一つまれば日蓮公聲のりわけ我の日本第一法華經の行者日蓮聖  
 人の弟子日蓮といふ離僧なり夫程の事も辨へなき分際にて人の迷ひを情さんとの仰の過言なり  
 今より説法やめ給へと喚のり給へば群衆の人とれをさきて若きも似合ぬ聖僧かな今當り在りて  
 法門を演たまへと諸人すしめけれども袖を拂てかへり給ふ龍象坊の眞實の所化に説伏られ面目  
 なくや思ひけん其夜いつちともなく逃失けり後に人の語るを聞ふ京都の鳥部野にて人の死骸を  
 類喰ひ叡山を連れて又鎌倉にも近年新墓を建て人の屍を喰ふとてかゝまゝも此龍象坊の所  
 爲なりとかやさて一も問答勝利の悦びにひさかへて江間道江守へ讒言のものありけん島田左衛  
 門山城民部の兩人を御使として四條頼基に仰渡さるやう汝頼基六月九日龍象聖人説法の場合へ  
 甲冑を帯りて狼藉し散々悪口をいたるより其身の不覺主家の耻辱あり今日より法華經よ心を  
 寄すよしの誓狀を書て給るべし其事のならずし知行を没収し長の暇を取まへとぞ聞へけ  
 る頼基驚て應へ給るやう日蓮坊の問答の場合へは稍後れて参りたれと遙隔て聽聞したるのみ  
 悪口低聲の思ひもよらず定めて讒言のもの、所爲なるべし其上我法華經を信ずるとは身の得脱

の爲のみならず三代相恩の我が君一門家臣もあまた有て御馬前に忠義を盡すもの其かず多し我  
 の親君公の後世を永く救ひ奉り未來永々忠勤を盡さんとの志願之唯今命惜さに知行をかたみ  
 法華經を捨る神文を奪ならば重恩の我君忽ち法華經の大怨敵とあらせ給ふべし主君大切と存ト  
 奉るゆゑ決して奪まらさすべからせとありければ是非なく知行を没収せられ今年三歳なる兒を  
 いだき親子三人流涙の身とあり給ひける高祖大士身延山に在てこれを聞たまひ陳狀といふ一書  
 をきたしめこれを御身の作として主君お捧げたまへとて頼基も贈り給ふ是を頼基陳狀とて祖書  
 願内廿九の卷も出たり茲も久本坊日元の妻とて七歳と五歳との男子兩人を左右よ携へ大士よ  
 見へあげ夫婦の去る十一月朔日に身まかりはべりしが此兒童等は聖人の徒に弟なりてよと今際  
 の遺言なれば將てまいるいとて潸然と泣大士御法衣の袖をまがり給ひ兄の日進も學問修行長者  
 しく生立たりこの二人も久本坊が紀念なればとて其法弟となり給ふ此兩人後年にねよ日心  
 日上下て日善の身延山四代の眞主たり日上下は古郷なる甲州今諏訪妙菜山久本寺の開山になり給  
 ひける今年の秋もさのふと暮雲に路絶冬の日も池上宗仲の妻紫銅の佛器二具使をもつて遠く供  
 養し奉れば十一月十八日太田乗明の妻室下總より練裏の小袖ならびに綿を送りまわらす又同廿  
 八日曾谷入道よりかねて高祖より細字の法華經一部を授與ありしを悦び其御布施として小袖二  
 重箱目十貫文扇子百本をさしげ奉りける一日天朗かに風もなく春ならぬとも日影うららかにぬ

りければ澤邊の巖石に坐して一會の説法をなし給ふとき獨の少女年廿歳にこへす柳色の薄衣に  
 霞紅の裳を曳て高坐間近く聽聞せり一坐の人々何ものなりやとあやしみたるに高祖大士説法  
 終りて其少女を顧りみて汝本跡をあらせと仰りければ桃李の顔も笑を含み我の佛勅をう  
 けて大法守護のためこれより西春氣川の山上は四方八面の嶺を擗へ身の諸佛諸神と同座にて良  
 の一方に安住し利益を七面にひろく圓滿具足を父とて鬼子母を母とする吉祥天女なり與人願く  
 り我に一滴の水を恵みたまはれといふにぞ大士側なる華瓶の水を興へたまひければ晴天俄に  
 雲を起しさしも美麗かりし少女忽ち二丈ばかりの蛟龍と現れ金の鱗を露し一鉄の牙を咬嚼し颯と  
 吹來る山嵐渦巻雲に容形をかしく西をさしてぞ飛去けり一座の男女頭を揃め身を震ひし其形現  
 の母形をたしかに拜みたる者もなかりけるとかやこれ未法の鐵守として水火の難難の災を  
 除き利生を万々年願し給ふ七面大明神これにてに當國八代郡遠光寺といふ寺あり遠光井の祖  
 父加賀美遠光の香華院なりしが此寺の住職宗明和尚は榮西禪師の法弟なりしが此大士を歸依  
 し改宗して名を日宗と改めたり當國戸田の長遠寺大心阿闍梨も亦これを聞て後れとて眞言を捨  
 て法弟となり名を久成日心と賜ふ此十二月とじめつたより大雪度降つたきけられ御庵室の  
 柱撓んで庇を倒したり高祖はかゝる大雪の中に在家の力をかゝる事も便ならずとて日興日心など竹  
 を掃把を結んでその破損を修葺せり建治三郎もこゝにくれ年改て弘安元年戊寅山中のならむ

日蓮大士眞實傳

深く往來どたへし御庵室へ白米一駄鹽一駄芋一駄十字三十枚春の初の壽として南條殿より  
 給この三月十九日より檀越の願として法華經一部の講説を始めたまひこれより日々懈りなく  
 三箇年より成就せり日向聖人御側ならずこれを書といめ給ひ一世に日向記と稱するに此間  
 たりけるけふしも内房の尼富士の一之宮よ公館のかへるさなりとて聖人の御安否を防奉るよし  
 いひ入れれば大士日向師を取次として仰せめるやう神の所從佛の主君ありその從者の神へ參詣  
 の序をもて主君の佛を訪たまふと尼御前の御身に取ての罪いと深し今日は見給に入まどかさね  
 て高せたまへとて其儘かへ給ひけるかゝる折から相俣なる正右衛門あつたうく馳り来て我  
 が聖無慮よ苦む聖人救はせ給へとありければ其の前の年我のトめて此地に來りしとて途中に  
 て聖飯を供養したる妻女なるべとて懇に御所念ありて護符を與へ給ひ一またちまぢ安座一  
 て母も子も恙なく夫婦悦んで種々の供物を獻し其恩徳を感得ける時に七月廿七日なりけるが阿  
 佛坊佐渡國より途々登山さへけるが高祖且悦び且驚き貴邊の齡九十に在さずや志あるに去る甲  
 戌より五年の間三度まで海山萬里を越て遠く音信たまひること生々世々のれもいひでなるべ  
 とありければ阿佛の複紗解ひらき清淨なる單衣取いだしこれの妻の千日が聖人へ送つてかこた  
 る御物なりとて奉りまた袈裟と法衣を置ならべ我餘命いくほどな一願ふは出家の願に入この  
 法衣を齎このけさを掛て寂光の旅立せんとたもふなりとありければ大士もほとく喜びたま

ひ剃髮の儀式をととのへ初て日得聖人どめされければ生前の本懐を遂たりとてまば一滯留し歌  
 風たぬそのうちにとある故徒弟を添て佐渡は歸り送り給ひけり高祖大士も去年十二月大晴日  
 の夜より御腹なやましくうち臥在す程ならぬとまかく春より夏かけて御心愜々しくわりける  
 まど四條賴基御藥を奉りその驗よや六月頃より追てみこゝる延やかよこのはをぞく恒の御心愜  
 まならせ給ひ御喜悅の多數御書またいめ能便りもがなと思す折から金吾賴基より价を奉りけれ  
 ば其書を探て御覽あるに昨年六月このかた流浪の難儀も法の爲と憂年月に還て信心も増たる  
 に諸天の御之からひにや主君江間遠江守先非を悔我を召返し再び開く家の廻もとの御知より土  
 地肥てゆたかなりと聞へたる佐渡井筒山の莊信州殿岡甲内船郷のを賜ひたり今生は此福を得  
 未來得脱を得ると皆これ聖人の賜物なりとありければ其書通を本尊の御前よさへけて喜悅給ふ  
 こと大かたならず返書を書て价をかへ給ひける内船は當國八代郡にして今に寺あり住持山内  
 船寺と傳へたり高祖の嬉しさま、其勸來人ごとに賴基が身の安堵をかたり給ひ御心愜ひうちに  
 年若て弘安二年巳卯正月春の始の御祝として上野殿より餅九十枚贈割五十本を奉る又御器一具三  
 十蓋六十秋元太郎よりまゐらすれば四條賴基の妻女より鷲目三貫文を供養す其外遠近の檀越よ  
 り春の巻いはるのへ客に應對价に返書のをけき春もいつかくれ散櫻戸にれどづれて遊庵九郎  
 守綱その父阿佛坊日得三月廿一日よ身まかりたりとて其遺骨を願ふかけて登山しその遺言に住

日蓮大士眞實傳

せて塔を此山に建たり大士厚く追善の法會を儲派ながらに樂原の邊に我が命を繼たまり  
 り一奮思ふ報下給ひける遠藤守綱も大士の法弟となり父の靈所よて割髪一阿彌坊日滿と號す佐  
 渡に歸てその家を寺と一蓮華王山妙宣寺と呼父日得を開山となり第二世より日滿住職と爲たりけ  
 る時に武藏國豐島郡金龍山淺草寺の住持寂海法印本覺坊河内坊といふ二人の隨身に世の行儀を  
 持たせ遠く此身延山に訪奉りは下りて高祖に對面あし昧を擧眼を低身の衆生をのへ借言やう我  
 さいつころ隅田川の渡りにゆくりなく下總なる宮木入道に值まひらせ我が天台宗こそ實に法華  
 の正統なるぞと難トかゝりし我が問入道頭うちふりて否々それはと隨返す數番の論よ舌の根  
 すくみ翹にさゝれ一小鳥のごとくいひかへす理もあなかりて在家の御身かくのごと一その御即  
 の聖人こそ見へまはしと告ければ入道もよろこびてさればとて書てたまひし紹介の書翰のこゝ  
 むありけりとさう出りそれより大士の化導を受世の嘲も物かひとそまゝ改宗して名を日取  
 と賜ひければ隨身の弟子もこれに感下どもに大士の徒弟となりて日増日可と召れける日取のこ  
 れより歸國して淺草寺の程近き端場といふ地に寺を建深榮山長昌寺とて今日の邊榮へける霜な  
 く庭もや、荒一落葉ふみわけ訪人も多かる中に別でけふ江川太郎左衛門吉久豆州莊山より遠く  
 れとなひ奉り布施をさゝりて聖人の安否いかいと尋ね給ふにむかひ和泉にありし時れものす途  
 中に因みたる昔語りには夜寒を忘れこゝに日數をかさね給ふにぞ高祖大曼陀羅を寄て授け法名を

日久と記一たまふその四大天王の誓の大藏の筆ありける又梁牌の本尊を授賜ふ年月を記さす事  
 に一首の歌

霜柱氷りの梁に雪の桁ささゆく氷に火こそ消けれとありこれを世に鎮火の本尊と稱す後年  
 莊山よ本立寺を草創ありけるかくて短き冬の日に池上より鷺目一貫文淺草裏の小袖一帯一節  
 栗すこゝいさゝか寒中の伺をなす南條殿よりは白米一駄を供養とす細谷川の氷りても下ゆく  
 氷の年月はまばしと止る堰もなく弘安三年庚辰正月五日のことなりさ相俣村なる正右衛門が妻  
 三歳ばかりある幼稚を抱て御庵室にねとづれて去る年の九月夫婦お死別れ人間の盛りも花の一  
 時にて頼すくなき世をねもひ我も此兒も聖人の徒弟になり夫婦の菩提身の佛果を願んどありけ  
 れバ大士憐れみてその誓を切て日佛と法名を賜ひ此山の麓に栖て折々に御衣を洗ひ清め御法衣  
 の縫びをつゞりて事へたてまつりけるその幼兒は是好磨とよび給ひ後出家して日了といひ大士  
 入滅の後西郡中野村の母の在所なるをもつて母と共に其地に住で妙了寺を開基一又相俣なる父  
 の家を寺となして正慶寺といひ名づけけりとなり茲に日法聖人この頃身延山よりありて一夜御菴室を  
 立出給ひに溪間より光明赫々としてさしければ立寄てその光りの根を尋給ふに松の太木にあり  
 けれの我久しく佛像の彫刻を願たれどもかゝる靈木を得て止事かゝと大士に許容を受て高祖の  
 尊像を彫み奉れり今身延山栖神法窟の尊像遷入さても鎌倉に在ての大元蒙古の賊船定て寄來る

べきやの評議に依て筑前博多を以て海岸の城を修復せしめ山陰山陽兩境の大小名をもつて京都の四方を堅め東山北陸の軍兵を起前教に屯し道々大軍を九州にさし下し防禦の備に他事も亦く世上の心騒立て危ぶむうちに年暮弘安四年辛の巳の春高祖御齡六十歳耳順ふと言はれし世のうきふりの昧相を聞もいふせき体想深山の春も盤ふかし如月中旬黄鳥の初音めづらに窓の戸をさしぬぎ給ふと思ひかけなき京都東寺の眞廣法印雪踏分て見へけるにぞ現ならず思召三十年前京都遊學のその時に厚く交りたる好身もてこゝに本門の大戒を授けたへて久しき其後の宗門弘通の物語りにさびし月日を送られける大蒙古の一亂もどよかく今年に過るべからずと上下萬人心を痛めけるに鎌倉中の弟子檀方師依の信者よりこびて法華敵對の現附唯今ならんと勝りがにいひ罵者あるより遠くこれを聞給ひさて不覺の者共かなかゝる國の煩ひも日本國中の諸萬人諸宗の醉に本心をうさひ法華經の妙藥を用ひず災害こゝに迫りたるなり大聖世尊本化の菩薩も子の病を親の看が如くさだめて不便なりいたしと思すらめ然るを我が大法の寶相に訪りのしたなくも市中に物を賣が如くに啗すると佛天への恐れ國土への懼りおりに去る文應元年の七月より言べき事の我のやいへり今さら人又何をかいはんもし路頭よ蒙古の事を私語ものあらば永く師弟の縁を断るべいと六月十六日この趣を書て一通の廻文となし熊王四郎もたせて鎌倉中の檀方にぞ觸たりける誠は佛法を信者は世法に違といふ此御心添こそ尊けれ

ても天下の人の思慮に違はず七月朔日霧よき一沖合にそれと定かに見かねども數萬の軍艦日本さして押來る此の事のやくも京鎌倉に駐進す四國九州の諸軍勢の筑前博多表に出張して今やと扣へ待かけたりさる程に大元蒙古の大將軍宋朝二百年の武勇を一戰にとりひき大唐四百餘州を切垣らけ其勢氣に乗じて日本を伐取らんと究竟の精兵二十四萬餘人軍艦四千餘艘に取乘てねしよせける其海上船の備を見るに大舶を船と艦とかけならべもやひを入れて通歩の板を渡し陣よに油幕を引て干戦を立列ね又陸の方への大板を筏と組で四五丈ばかり鉤をもつて水の上よひき並べ波の上よ平なる路幾條も出來てこれより馬の轡を揃へて陸に立向んと結構なりかくのごとく五嶋より東博多の浦まで海上四圍三百餘里俄に陸地となりて鐵城を構へたり我が日本の陣取の博多の濱邊十三里の間石の堤を高く築き前敵を防ぐが爲め切立となし後は味方の爲よ平らかにして懸引自在なりと思ふ處に敵の船には結構の如き數十丈の柱をねらて其上の横木に人を居らしめ望遠鏡をもつて見渡すゆゑ日本の陣中眼の下まで毛髮の尖も算つべいかくて合戦いかりあらんと評議區々の處へ彼の賊船より山嶽も崩るばかりの響をなす大櫓の轟き鐵丸飛來り霹靂く事なびただしく此の鐵丸一度は二千三千うち出すこれに當りて死するもの幾萬人そのうへ城門櫓も火燃つきて打消にいとまなく唯畏れたのくばかりなり斯ての勝利思事なるとて松浦の一族一千餘人その夜浦つたひに夜討をかけたけりける其志といさまいけれども



味方のわづか九牛が一毛たとへば千駄の薪の燃立たるよ一杯の水をそゞぎたるがごとく敵をも  
 多分討取たれども終に皆生捕れ鉄の索にて彼の船端を縛らるらべて日本勢に見せたりけれを重て  
 戦んといふものなかりけるそれより大元の賊船破竹の勢ひは乘門司赤間が關より長門周防にと  
 りかゝらんと見へたるは賊に盤石の下に鷄卵を置よりも危かりしありさまなり時に人皇九十代  
 宇多天皇極慮を苦しめ給ひ鎌倉に勅命有て將軍惟康親王日あらせりて御進發には定りたれども  
 日本の危急人力に協はず兼て數ヶ度の忠諫よればたる正法の行者日蓮聖人に護念の力をか  
 らんものと違ふ身延山に仰ありけるよぞ高祖大士國恩を報へ奉るの唯今なりと長六尺五寸幅五尺  
 五寸の六旗兩面に月と日をまたくめ四方にの四大天王八方に八大龍王を畫しめ中央日月のうち  
 又輪圍具足の大曼陀羅を御染筆ありてこれをさし給ふ宇都宮貞綱先陣として軍勢三万余人地  
 御旗をさして九州にむかひ筑前博多の山上雲をつらぬき怨敵退治の御旗曼陀羅翻として  
 嵐よひるがへりいとも怒く思はれたり時弘安四年八月朔日一天五色の雲みだれたつよと見  
 へしが颯風俄に吹起り山を拔擧を飛ばす震動雷電大元紫古數萬の軍船風に木の葉を卷が如く  
 千間吳萬の三人の大將も波に漂ひ沈るゝを生捕ける翌二日の早天晴海れたやかに成れば三  
 度勝鬘を揚て軍神をいさめ奉り御代萬々歳と祝しける鎌倉の將軍出馬に及ばず九州の軍勢及に

血塗すして十二分の勝利を得たる事ひとへは法華經の威力日蓮聖人の守護なりと將軍家よと御  
 恩徳有て此の御旗を宇都宮貞綱に預けさせ給ふそれより池上宗仲よつたへて今の兩面を別て月  
 の御旗は身延山にねさめ日の御旗は武州本所押上天松山最敬寺にあり是他國侵逼の難を防ぎた  
 まひ一本朝萬年守護の御本尊と稱し奉るなり是に依て鎌倉の檀越より御經の利益のトめて天下  
 にかくれなきよを祝し布施を獻し喜びを演るもの多かりける九月二日波木井六郎實長今年六  
 十の賀を祝ふとて大士を其邸宅に請待し奉り一門舉て賑ひ喜び實長今日より家督を嫡男彌六郎  
 長親にもすり替を切て入道法寂日圓と名づく大士自ら我小像を彫て波木井殿に授け年頃の恩  
 を酬して八日の朝暇を告て身延山よかへり給ふ此頃よいたりて法蓮大ひに開け山また山の嶽  
 一かる身延の澤は高祖を訪奉るもの絶間なく日々の參詣貴賤男女星と列なり雲と御座室の  
 處席諸人居並んで錐を立るの坐もあらざりければ是非なく地を垣し石を居敷に六丈四方の坐を  
 いとなみ初て身延山久遠寺と稱し十一月二十四日を以て開堂の供養を行れけるにぞ遠近の參詣  
 群集をぞ成たりけるかくて高祖大士常は富木殿の舊恩を忘給はず常忍の像を手自御彫刻ありて  
 側よ安置し朝夕は尊敬を加へたまふ常忍もこれを見ていと勿体なきとよねもひみづから大士の  
 尊像をささみ平日禮拜怠り給はずこれを互交の尊像とて今猶現存せりとぞ法門無盡かぎりある  
 衆生教化にいとまな一往を送り來を廻へ法法夏も夕顔の花もまほみて宵の袂冷しき文中旬

高祖の御身に病を發し、滲氣色は常に替らせ給ひねども御事もや、減り起居何となく御容体からず見ゆるよど四條比企をのりつめてこれを見て追々に登山し御勸解を訪奉るに高祖大士思召とやありけん池上宗仲の宅も入て養生をせばやと仰有けるよと遠路の山河いかがあらんと皆案下わづらひけれども折角の御意に背くも恐れ多しとて其要意取々にありけるが波木井入廻の次男彦次郎實繼を伴にさへ兼て愛し給ふ逸物の真馬も傍望にまかせそれまで送奉る法子檀方多く附添まらせ九月の八日盤食を召て程なく身延山を御出立その夜の下山兵庫が宿にやどり玉ひ九日の颯澤ある大井莊司のもとと御止宿十日には會根の次郎が方に宿し十一日馬駒十二日河口の梅屋上房に止宿十三日吳地の遠山藤學がもとに御入十四日駿州竹の下鈴木繁八に止宿十五日相州關本下田五郎左衛門これみなもとより師依の方々なれの御意のうちに承り別れとねがひめこゝろよ其供養を受玉ひ十六日平塚長谷川氏にやどり玉ふ其跡松雲山薬法寺といふ十七日瀬谷の妙光寺も入せ玉ふ住持文教阿闍梨宗旨を改て法弟となる名を日成と賜ふ十八日午の時に池上に若玉ひ十九日御書を御老たゝめありて難處多かる此程の旅路彦次郎實繼厚く介保なり玉ひ馬も亦よく我が意にかなへり彼是御心づくの鴻恩生々忘れがたし我病愈はめでたく而會をべり老病こゝろもとなしたとへ我何處にて死し侍るとも墳をば身延山に建さへ給へか」と誓て彦次郎の歸る便宜は波木井入道に贈り給けり廿三日大曼陀羅を畫て末

翁宗仲も與へ給ふに宗仲つゝいんでこれを受けて言やう去る建治元年我が邸のうちに本門寺を建立なしたれども開堂の供養を遂す聖人御全快の上の一會の御法要を願奉るとありければ大士も今般の病氣はものや定業にして愈べしとも覺へず僕侍けふは食もすゝみいと心も晴やかなるのと仰ありて洪鐘を鳴し法鼓を搥てありければ此程大士の病ひを訪てこゝに聚る僧俗男女その大堂に居並んで盤々と見へかける大士強て起出給ひ沐浴盥漱御座を召て堂に昇り誦經唱題を給へば大衆も同音に和し奉る夫より高座に登り立正安國論を講釋なり給ふ一會の佛事式法の如く行れ皆々宗運萬歳を唱へけりかくて大士は疾病いよくねもらせ給へども御病牀いまして法門を談トいさゝか例にかはらせ給はず側をかへりみて我が死するときは大地震動すべし左もなくは我は死なむ各心を勞したまふとありて十月三日期を召て立像の釋尊立正安國論御免狀二通御紀念にまゐらすよ一仰有て又日昭日期日向日頂日持の六人を六老僧とさだめ我が入滅の後のこの六人を我が如くに仰ぎ事へよまた我が遺骨は身延山に納めて六老僧輪轉よこれを守護すべしと左右を召てこれを仰遣したまひ又御法子檀方へ御遺物を頒け與へたまひんとて日興師も筆をとらせて一々に是を記させ給ふそれ彼と冬の日影の移り易くけふも十一日諸佛檀越一寸の間をも惜んで御側をさすありけるが高祖大士は經一磨よ經一と御病床ちかくめしよせられねもさ御枕を擡げ右の御手をさし伸てその頂髪を三度まで擡撫給ひ鳥の將に死ぬる

日蓮大士真實傳

二百三十四

時その鳴聲悲し人の將に死なん時そのいふ言よりといへり決今第十四歳つゝんて我が遺命を承  
 隨れ我建長五年夏の頃初めて本地難思の妙法を弘通し日本國の一切衆生を救ひ得させんとの  
 願も今すでに満足とといへども我一期の間鎌倉殿に鎌倉三度になれよ伊立よ三年佐渡よ四年住  
 處を連れ一こと二十餘度そのうへ安房上總武藏諸國の教化に年命たらず唯今入滅なすにつけ心  
 變るゝ京都の弘通いまだ此御題目一天の君の御耳に觸奉らず汝これより日朝を聞と願ふ學問修  
 行成就せば華洛に登りかならず木化の妙法を天聰に達しこれよかると怨なる御遺教に經一層  
 は御手にすがり一聲よと泣きつみ畏み言す詞さへあみたに懸る朝時雨利はしあゝぬ日朝日向  
 左右より御介保こゝろを込て夜盡とも御側にある僧俗男女御題目を唱へつゝ送る日朝も短くて  
 けふ十三日の朝卯の時頃一搖ゆるぐ地盤のいゝきに客御病牀に馳聚りけるに高祖大士は安然と  
 して一座にぞめし宜ふやう今後五百歳の時を得て宗運ひらく法の華一乘妙法蓮華經といふ大  
 聖世尊五百歲點劫の間本因本果の妙行にして我等衆生一念信力のうちよ其功徳を願受るこれを  
 即身成佛といふもし信不弱くして我が教へに違ひなばこれまで永く六道の苦界に悩悩と又無道  
 に沈みやせん其時日蓮を恨み給ふなと御聲まつかに御教導ありて御側よ合てかねて御慈華の曼  
 陀羅を掛させ給ふ後の世に臨滅度時の御本尊と稱し奉るゝこれあり續て幽微き御聲に善喜品を  
 誦み給ふよぞ大衆も一同よ靜々と御經を誦證し奉る御香爐の煙りたぬくくに薫下わたり御大の

同の御聲を聞いていゝ此辰の刻にやとればもる頃慈顏御笑に念給ひ實體暖るが如く大涅槃  
 に入給ふ時に壽算六十一歳壬午に生れて壬午よかくれさせ給ひけりかくて日昭聖人前無妙法  
 蓮華經と唱へ揚たまへハ僧尼俗子のいだめなく御題目を唱へ奉り地を走る獸林に群がる禽も  
 五十二類の愛別を嗚鳴このとさ池上の蒲山諸木に花發いて法性の春を表すこれ我が宗門御會式  
 よ花と挿由來のこゝに始りける十四日戌の刻寶棺に収め奉りその夜子の上刻御出棺御葬式の順  
 列は明慶御華血をさげ次郎三郎大續火を舉赤白二本の大蓮華の上野殿に四郎次郎又赤白二流  
 れの御旗は池上右衛門大夫中田左衛門尉伊香爐の宮木入道鏡鉢の太田左衛門入道花畑は南條時  
 光御文机の富士四郎太郎御隨身の法華經は四條頼基御隨身佛の比企能本彦香は源内三郎是より  
 左の方は日位日忍日持右の日保日實日法これより御寶棺御前は日昭御後は日朝御與鷹は日高日  
 興日合日秀日祐御天蓋は太田三郎明持御太刀の兵衛志御腹巻の椎池四郎御馬は熊王四郎これ  
 を牽行列徐かにして結界四門の西より入て東門より出て南門よ入る三巡四邊式法のごとくそれ  
 より寶棺を茶毘所よ安し火を舉て梅檀の薪にうつそ此夜月あきらかに星きららめて沙羅雙林のひ  
 かしもこゝに思ひ出られ十六日御眞骨を拾探て寶瓶に納め檀上に安置して初七日の御法會まで  
 法のごとく修行ありける彼の大聖釋尊は靈鷲山の良位跋提河の邊純陀が寮に入滅なり給ふ此日  
 蓮大士は身延山の良位よ當り多摩河の邊宗仲が宅に滅度なり給ふ古今かはらぬ大涅槃とぞれも



六十四



六十五

ハレける斯て廿一日の朝法弟遺越一同御伴よて御眞骨池上を御出立ありて身延にれもひき給ふ  
 其夜は相州飯山に御止宿廿二日竹の下廿三日駿州車返廿四日上野南條氏廿五日身延山に御坐  
 わりけれバ波不井人道家子喪服を着て御出迎に及べれ廿六日に二七日の御法會執行あり甲  
 駿二ヶ國の檀越信者雲のごとく群て拜み二月二日御中陰の佛事ありて在家の男女皆々涙なが  
 らよ山を下る六老僧の御廟所の邊近く各庵室を構たまふ日昭聖人の不經院今の南の坊日昭聖人  
 は正法院いまの竹の坊日興聖人の常在院今の琳藏坊日向聖人安立院今の廻澤坊日頂聖人は本國  
 院今の山本坊日持聖人は本應院今の鐘の坊これなり又四條順基の今年家督をたて、其身の主君  
 暇を請身延の山内よ端場坊をいとなんで茲に籠りこれより生涯山を出ずして此坊舎を終られ  
 ける明れば弘安六年癸未正月廿三日百箇日の喪終て各相讀して輪番をさだむ正月日昭二月日  
 昭三月日傳日賢四月日頂五月日持六月日辨日忍七月日合伊賀八月日法日位九月日興十月日實日  
 保十一月日向十二月日秀日家と相ざるして此月まづ日昭聖人御番をばとめ給ひける今年十月池  
 上に一周忌といひてみて高祖在世のごとく御書を賜りしものは其御眞跡を持参して目錄よ入るべ  
 きよ一諸國の檀越に綱渡し各持ち聚りてこれを記るすに御書百四十八通四十卷といひて録内とい  
 ふ又此際に向たる御書百多一とて三回忌法會のごときまた池上に聚集どころは存二百五十九通  
 二十五卷といひてこれを餘外といふあわせて六十五卷御書四百七通これを御抄判を拜して世よ傳

日蓮大ひなるか本化の智徳其法いよく實なるかゆゑに其位いよく卑く身は日本國東  
 の國に海郎の手と生れ佛勅に任せて唯一乘の妙法を一問淨提の輝かせ給ふ高祖前に高祖な  
 く高祖の後に高祖なり實に一天四海佛門の棟梁衆生救護の大導師なり大士在世のごとく左右に  
 て重んやう我たとひ富樓那が辨を振ひ目迷が通力を現すとも其言ことの當らずその陰なかるべ  
 し今言れく事の後に合はばこそ世の人我を信すべし文應元年の立正安國論に勘へたる三災七難も  
 あな一々符合きたりされば身の下賤に生れたれば人の罵り摺むとも持つ處は尊き法華經あれば  
 爾よ弘まるべしあかれれば後年に及び我が屍に利益ありて人の渴仰せんと今の鶴が岡は鎮座あ  
 る八幡大菩薩のごとくなるべしと仰殘されし録内十四の卷の金言虚一からず大士の十三回忌辰  
 よ當り經一曆廿六歳今は龍華院日像と名乗高祖の還命を頌上にいたし永仁二年四月廿八日京  
 都に登り禁裏日の御門にたちて朝日に向て初て御題目を唱へしとめ説法弘通四十年の後御弟子大  
 覺大僧正妙實その後を繼給ひ時文和元年六月廿五日人皇九十九代後光嚴帝御靈符を染させ給ひ  
 日蓮大菩薩と勅號ありて僧正妙實よ下賜りけるこれ高祖大士滅後七十一年に相當る我が屍も  
 今の八幡大菩薩といはるゝやうよ崇めらるべしと仰殘されしこと茲に符節を合せたるは誠に本  
 化上行の御再身兼知未萌の大智識とて思合されける御眞廟の舊身延山庵室の地よいて八面の  
 淨土のうちに御石碑あり銘の日昭聖人の御筆なり又御眞骨堂にの水晶八角の玉の瓶四方四方大

天王の後藤祐乘の彫にして七寶の瓔珞珊瑚の天蓋に莊嚴し御眞骨の鮮明に其内に拜れたまふ  
 何ゆゑに碎さし骨の名残をとれもへば袖ぞ散けると元政聖人の詠給ひも殊に尊くねも  
 ける當山十一代行學院日朝大聖人伽藍を今の地に移し二十三間の祖師堂を造立し山門仁王門  
 三重三重二重の大塔本堂位牌堂經藏鐘樓また通本橋を渡り唐門を二千疊敷の大方丈大書院三十  
 六棟變をならべ御眞骨堂古佛堂三箇所の御寶藏その外諸州の廣大築るいとまなし塔中の坊舎二  
 百七十坊別に西谷檀林を構へたり當山の結構とら斯のごとく諸堂の本山國々の本寺ありせてこ  
 れをいひその敷量知るべからず今大士入滅後五百有餘年日本一州法華の寺院——餘よれ  
 よふまことに本化六萬世河の砂の算限りまられぬ宗門御繁榮は末法萬年勳なき皇國の柱石と  
 へまられけり

撰者曰祖書録内録外結集の事は別よ評論あれども此書は唯古來の傳説を折衷し御一代の編  
 作を旨とするなれば結集の一事は世間普通の説に任すのみ讀者遺憾と爲と勿れ

日蓮大士眞實傳

明治十九年十二月廿八日御届

定價壹圓

同 廿 年 一 月 出 版

編輯人 不 詳

東京府平民

出版人 森 仙 吉

日本橋區橋町四丁目  
十一番地

發 日本橋區橋町四丁目 鶴 聲 社

大坂心齋橋南詰 東 京 屋

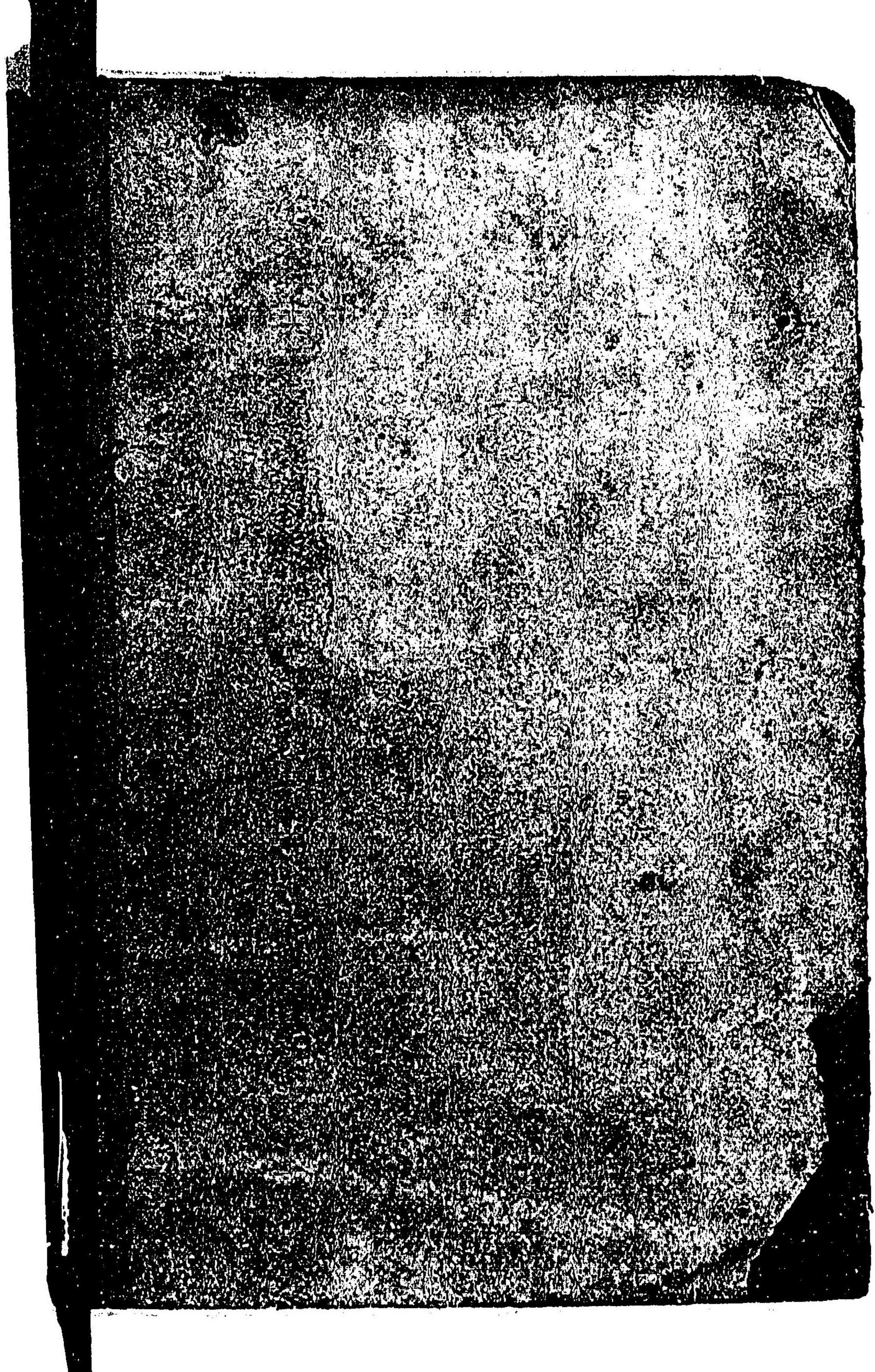
横濱吉田町一丁目 鶴 聲 社 支 店

兌 西京寺町通松原南 改 進 堂

214

1

84







020075-000-8

特12-631

日蓮大士真実伝

小川 泰堂/編

M20. 1

ABH-0277



